

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 178 February 2026

## 研究の最前線

### 2025 年度冬期国際シンポジウム「大国間競争と中小国の生存」開催

センターは 2025 年 12 月 4-5 日に、今年度の冬期国際シンポジウム “Great Power Competition and the Survival of Small and Middle Powers: Perspectives from Eurasia and Beyond” を開催しました。これは科研費基盤研究 (B) 「大国主義の現代史」(代表:宇山智彦) と、センターの「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」プロジェクトが企画・実行したものでした。プログラムは前号に掲載しましたが、個別の報告タイトルの修正がありましたので、ウェブサイトで最終版をご覧ください。冬の訪れがやや遅かった札幌ですが、シンポジウムの前日から雪が積もり始め、美しい雪景色で参加者を迎えることができた反面、転ばないように気をつけながら食事などに移動することになりました。

大国間競争の理論と現状をテーマとした第 1 セッションでは、報告者 3 人もオンライン参加となりました。まずハンナ・サミール・カッサブ氏が、リアリズム国際政治学の立場から、弱い国の大国に対する行動を特徴づけ、サブサハラ・アフリカ諸国が中国・ロシアに支援を求めることの危険性を指摘しました。次に江藤名保子氏は、経済大国としての自信



シンポジウムを終えて

を深める中国の国際戦略を、経済安全保障戦略、ディスコース・パワーの強化、アメリカ以外の国々との協力といった面から分析しました。三牧聖子氏は、第2次トランプ政権による、アメリカの使命に関する「例外主義」の放棄、戦後国際秩序の否定、小国の主権の軽視と帝國的幻想の復活を取り上げ、国際主義的なアメリカはもはや復活せず、「アメリカの世紀」が終焉する可能性を指摘しました。討論者の渡邊啓貴氏は、アメリカの優位性の時期による変化や、大国の勢力圏形成の手法の多様性、中小国のレヴァレッジと自律性の関係などを整理しました。その後フロアを交えて、国際関係はゼロサムであるか否かという問題や、トランプ外交の性格づけなどをめぐって熱心な議論が行われました。

第2セッションは中小国の主体性と戦略をテーマとしました。古賀慶氏は、ミニラテラリズム（3つから6つ程度の国による協力枠組み）のうち、冷戦期のASEANなどインド太平洋地域の中小国が形成したものに注目して、それらの分類と、能力および限界を論じました。ミラス・ジエンバエフ氏は、アメリカ主導のリベラルな国際秩序が崩壊する中で、ミドルパワーが大国間競争の圧力を受け、相互連携の難しさに直面しながらも、戦略的自律性と多国間主義の維持に努め多様な役割を担っていると論じました。宇山智彦は、大国が威信にこだわる感情的行動をしがちなのに対し、中小国は他国との関係性を利用して力を発揮すると述べると同時に、大国中心の階層的国際関係の温存や、権威主義や保守的民族主義が脱植民地化にもたらす歪みも指摘しました。討論者の大庭三枝氏は、中小国の大国との関係への依存性、多国間主義と地域主義・地域間協力やグローバル・ガバナンスとの関係、ミドルパワーと小国の違いなど重要な質問をしました。フロアからも、ウクライナ戦争の状況を意識しながら、中小国の未来を楽観的に見てよいのかなど、多様な質問・意見が出ました。

第3セッションは、新しい現象や概念に注目しながら国際関係の構造的・質的变化を検討する場となりました。アイシェ・ザラコル氏は、相異なる政治体制やイデオロギーを持つ世界の多くの国で強権的指導者が登場していることは、近現代に進んだ主権の非人格化が逆転し、再人格化が起きていることを意味すると述べ、それが国民国家と外交に与える影響について、3つのシナリオを提示しました。セルビ・ドウルディエヴァ氏は、脱植民地化に関連する諸概念を整理したのち、ロシアが植民地主義・拡張主義を捨てない旧ソ連地域における問題の深刻さを指摘し、国家中心主義と認識論的不公正の克服や植民地主義犯罪の責任追及を通じて、国際関係論を脱植民地化すべきであると説きました。マリア・マルクソー氏は、さまざまなアクターがウクライナ戦争の和平に異なる意味を込め、異なる時間軸と戦後戦略を持っていることを指摘し、平和は将来の戦争の抑止と戦争責任の追及を通じてもたらされるべきだと述べました。討論者の細谷雄一氏は、日本思想史や「非公式帝国」論、東アジア情勢などに幅広く言及しながらコメントしました。フロアとの間では、ポピュリストと強権的指導者の違い、国際的規範構造の崩壊、脱植民地化と戦争抑止の関係などが議論されました。

2日目の第4セッションでは、第二次世界大戦終結80周年を意識して歴史に目を転じ、戦前・戦中の大国・中規模国の戦略をテーマとしました。著書『外務官僚たちの大東亜共栄圏』で数々の賞を受けた熊本史雄氏は、国際連盟脱退時およびその後日本外務省が表明した、同連盟への不満や、情勢悪化を中国の責めに帰す見方を分析し、特に1934年から35年にかけての重光葵外務事務次官の主張が、日本の国際協調主義との決別と大東亜共栄圏構想への傾倒の転換点となったと述べました。マレク・コルナト氏は、1939年の英・仏・ソ連の対独同盟形成の交渉過程を再検討し、その際に赤軍の通過権を拒否したことでポーラン

ドが批判されたが、通過は実質的に占領を意味しており、ポーランドと直接交渉せずむしろドイツとの交渉を準備していたソ連は、平和を保つために何もしなかったと述べました。花田智之氏は、ソ連の対日戦争の準備過程を詳細に述べるとともに、背景として日本の脅威についてのソ連の認識を検討し、日本の復興への警戒と自らの権益増大の意図に基づくソ連の戦後構想を、アジアの冷戦の起源の中に位置づけました。討論者の田嶋信雄氏は、3つのペーパーの内容を戦争抑止の失敗という観点でつなげたうえで、第二次世界大戦の従来型戦争としての面と人種的殲滅戦争としての面を論じました。フロアとの間でも、宥和政策の誤りが現在に対して持つ教訓など、さまざまな論点が活発に議論されました。



第5セッションの様子

第5セッションでは、現在のロシアの帝国主義的行動と周辺国の反応を多角的に議論しました。アリツィヤ・ツラーノヴィチ氏は、ロシアが侵略の正当化に使っている「正義」と「使命」の言説を取り上げ、ロシアのメシアニズムは、自由を広めるアングロサクソンの使命と異なり、保守的で西側への対抗を旨とすること、ロシアの論者は中国を使命なき国家文明と見なしていることを指摘しました。小森宏美氏は、エストニアとロシアが現在に比べ穏やかな関係にあった1990年代に、前者のEU加盟問題やロシア軍撤退問題をめぐって互いに交わっていた批判を取り上げ、近年注目されている偽情報を用いたロシアのプロパガンダ活動が、当時に遡るものであるという事実を浮かび上がらせました。赤尾光春氏は、ウクライナ侵攻開始後にロシア語の排除が急速に進むラトヴィアでの現地調査に基づいて、ロシア語話者住民はルーツにおいてもロシア国家への態度においても多様であり、そうした多様性やローカルなアイデンティティに配慮しながらラトヴィア社会に包摂していく必要があると述べました。討論者の廣瀬陽子氏は、各報告に現れる「正義」の多層性、正義と法の支配の関係、安全保障化政策と多言語的日常的緊張関係などを指摘しました。フロアとの議論では、犠牲者ナショナリズムの両義性、「ロシア」の多義性などが話題になりました。

第6セッションは、大国としての自己主張を強めつつあるインドとトルコに注目しました。中溝和弥氏は、モーディー政権下のインド政治をヒンドゥー至上主義と権威主義、暴力に基づく「服従の政治」と特徴づけ、近年は国際会議での行動や周辺国への態度にも「服従の政治」の傾向が見られると指摘しました。ハーカーン・ヤヴズ氏（オンライン参加）は、トルコの新オスマン主義は、世俗的国民国家を創ったケマル主義に対抗し、オスマン帝国の過去を選択的に再解釈する大国主義ナショナリズムであり、エリート主義的な西洋化に疎外感を持つ人々のアイデンティティを再定義し、権力構造を再編し、野心的で多角的な外交政策を支えていると述べました。澤江史子氏は、オスマン帝国の繁栄のイメージと、西洋中心の国際秩序の中で劣位に置かれたオスマン帝国末期のトラウマが、諸外国のイスラーム嫌悪への対抗に見られるポストコロニアルな姿勢と、周辺諸国への介入・勢力拡大などのポスト帝國的なスタンスとが組み合わさった、修正主義的なトルコ外交の基盤になっていると論じまし

た。討論者の竹中千春氏は、3 報告に見られる内政と外交の連関を、国際的な諸条件を背景とした権威主義的ナショナリズムの流行として整理し、インドとトルコの類似性と相違、両国の関係についても豊かな知見を提供しました。フロアからは、インドとトルコは本当に大国の地位を求めているのかなどの論争的な問題提起がありました。

全体として、いくつもの国の大国主義がますます露骨な姿を現していると同時に、中小国が自らの生存や地域秩序の維持のためにさまざまな模索を行っていること、第二次世界大戦の教訓も考えながら、ロシア・ウクライナ戦争をどう終わらせるかが今後の世界にとって鍵となることが、危機意識とともに確認されました。国際関係論と地域研究、現代史研究の対話を通して、不安定化の時代を生き延びる知恵を探るというシンポジウムの趣旨は、十分に達成できたと思います。

参加者は、対面とオンラインを合わせて、1 日目が 86 名、2 日目が 75 名でした。外国人報告者の方々からは、大変タイムリーな企画で、これまで自分が参加した国際会議の中でも最もレベルの高い議論ができた、討論者のコメントも有益だったという評価を得ました。分野的にも地域的にも多岐にわたるテーマであるにもかかわらず、極めて活発でまとまりの良い議論を行うことができたのは、参加者、特に討論者の皆様のお力によるところが大でした。

また、付属企画として 12 月 7 日に早稲田大学で、シンポジウムのゲストのうちマルクソー、ツラーノヴィチ、ドウルディエヴァ、コルナト、ヤヴズ、ジエンバエフの各氏が報告する国際ワークショップを開催しました。今度はロシアに隣接する地域の話題が中心になったこともあり、ウクライナ戦争の原因、欧州特にポーランドのロシア観、ロシアの文明観における宗教の位置づけなどをめぐって、熱い議論が交わされました。[宇山]

## 北大ーソウル大ジョイントシンポジウム分科会 **Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region** を開催

スラブ・ユーラシア研究センター（以下 SRC）は、11 月 3 日に第 28 回北海道大学ーソウル大学校ジョイントシンポジウムの分科会「Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region（ケアと共感：スラブ・ユーラシア地域における学知と社会発信）」を SRC 大会議室において開催しました。実施にあたっては、北海道大学国際連携推進本部による支援事業に採択され、その経費支援を受けました。

分科会はソウル大学校ロシア・東欧・ユーラシア研究所(以下 IREEES) との共催で行われました。日韓両国におけるスラブ研究の中核を担う両研究所は、これまでも継続的に交流を重ねてきており、ジョイントシンポジウムの枠内で分科会を開催するのは今回で 11 回目となります。

現在 SRC では、これまで蓄積してきたスラブ・ユーラシア地域研究の知見を基盤として、急激に変動する世界秩序の中での生存戦略を探究する研究プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」を進めています。一方 IREEES では、韓国における看護人材不足という社会的課題を背景に、「ケアの哲学」に関する人文知を理論的基盤とした基礎研究「ロシア語話者移民の看護師・医療従事者の養成についての研究」を立ち上げました。

本分科会では、当該分野で日韓を代表する研究機関によるこうした最新の研究プロジェクトの成果を生かし、ますます多極化し多様性を増す現代世界において、「ケア」や「共感」が果たすことのできる役割を多角的に検討することを目標としました。社会の分断、対立、不平等といった現代的課題に向き合い、社会・産業界との協働を通じた研究・教育の可能性を探る場を設けました。

当日は長縄センター長のあいさつで開会した後、ロシア・モンゴル・韓国におけるケアや共感のさまざまな実践が、戦争や革命、介護・看護、地域コミュニティ、記憶、ジェンダーといった現代的な視点から取り上げられ、きわめて充実した議論が行われました。参加者は計23名で、大学院生を含む若手研究者の報告も高い評価を受けました。次世代へ研究のバトンをつなぐという意味でも、意義深い機会となりました。

センターからは三本の報告があり、安達准教授は、ウクライナ侵攻を語るプーチン体制の言説におけるメロドラマ的想像力の濫用を指摘するとともに、人々の抵抗を支える情動の可能性を探りました。

日本学術振興会特別研究員の廣田千恵子氏は、モンゴルのカザフ人コミュニティを事例に、不安定な状況に置かれた女性たちの刺繍実践を通じてかたちづくられる、地域社会におけるケアの共同体のあり方を分析しました。

大学院修士課程に在籍する菅野理貴氏は、ソ連によるアフガニスタン侵攻の退役軍人（アフガンツィ）のネットワークが男性間のケアと記憶の継承を可能にしていることを指摘するとともに、ホモソーシャルな文化が愛國的な英雄主義や男性性の強調へとつながる負の側面にも着目し、その複雑な二面性を分析しました。

また、長縄宣博教授とミルラン・ベクトウルスノフ特任助教がコメンテータを務め、センターに客員研究者として滞在中のナリマン・スカコフ氏が司会を担当しました。さらに、ボリス・グロイスの『ケアの哲学』の翻訳者である河村彩准教授（東京科学大学）をゲストコメンテータとしてお招きしました。

分科会を通じて、「ケアと共感」というテーマの重要性和今日の意義、ならびに日韓共同研究の有効性が確認されました。今後は、両研究所の現在のプロジェクトを発展させる形で、オンラインを中心としたセミナーや研究打ち合わせを継続的に実施する予定です。またSRCでは、センターを拠点とする国際サマースクールの開催を計画しており、IREESも潜在的な参加機関として想定しています。大学院生やポストドクレベルでの積極的な交流を通じて、将来的な国際共同研究の基盤形成を進めていく予定です。[安達]

The 28th Hokkaido University – Seoul National University Joint Symposium:  
Slavic-Eurasian Research Center & Institute for Russian, East European, and Eurasian Studies

동북과 공경에 대한 학문적 연구와 그 사회적 확산: 슬라브-유라시아 지역을 중심으로

# Care and Empathy

## Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region

ケアと共感 ——スラブ-ユーラシア地域における学知と社会発信

Language: English  
There is no translation.

**PROGRAM**

**Opening Remarks**

**Session 1 (13:10-15:10)**  
**Theoretical and Conceptual Inquiry into Care and Empathy in the Slavic-Eurasian Region**  
Moderator: Hakyung Jung

- Jonghyeon Lee — Biopolitics and Care in Soviet Russia  
Discussion: Norihito Naganawa
- Youkyoung Hwang — The Problem of Care in Early 20th-century Russian Literature  
Discussion: Seungmo Park
- Daisuke Adachi — Melodramatic Imagination as Cultural and Social Power in the Slavic-Eurasian Region  
Discussion: Jongsu Park
- Heseung Choi — Comparing the Concept of Care in Russian-Speaking Countries and Korea  
Discussion: Aya Kawamura

**Session 2 (15:30-17:00)**  
**Care and Social Communities in the Slavic-Eurasian Region**  
Moderator: Nariman Skakov

- Chieko Hirota — Handbook Enhances Self-Affirmation: Forms of Care in the Kazakh Community in Mongolia  
Discussion: Sun-Mi Chae
- Yoomi Jung — The Current State of Multicultural Education in Korean Nursing Colleges  
Discussion: Mirjan Bekursunov
- Riki Kanno — Not Great but Patriotic War: Care for Veterans and Memories for the Next Generations after the Soviet-Afghan War in Russia  
Discussion: Seo Hyun Yoon

**Closing Remarks**

**Date and Time**  
Monday, November 3, 2025, 13:00–17:00

**Venue**  
Slavic-Eurasian Research Center, Room 403  
Hokkaido University

**Co-organized by**  
Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University (HU)  
Institute for Russian, East European, and Eurasian Studies, Seoul National University (SNU)

**in collaboration with**  
Platform for Explorations in Survival Strategies (SRC)  
Collaborative Research Group for “Research in Training for Russian-Speaking Immigrant Nurses and Health Care Workers” (IREES)

Contact: Daisuke Adachi (adaisuke@slav.hokudai.ac.jp)

There is no parking lot. Come in public transport.



充実したシンポジウムを終えて



和やかな雰囲気で行われたレセプション

## メルボルン大学・北海道大学共同開催 国際共同ワークショップ報告記

昨年の12月8日から9日にかけて、メルボルン大学にて国際共同ワークショップ「War, Migration, and Identity: Exploring New Agendas for Ukrainian Studies in the Asia-Pacific Region」が開催されました。本イベントは、メルボルン大学と北海道大学の協力により、青島陽子氏とイリーナ・スクビイ氏の主導で実現したものです。

アジア、オーストラリア、ヨーロッパの主要な研究拠点から多くの参加者が集まりました。オーストラリアからは、メルボルン大学、オーストラリア国立大学、オーストラリア・カトリック大学、クイーンズランド工科大学、モナッシュ大学などの機関から20名以上の研究者が参加しました。オックスフォード大学（英国）、ヒルデスハイム大学（ドイツ）、南洋理工大學（シンガポール）からも研究者が参加し、活発な議論が行われました。当センターからは、青島陽子氏、野町素己氏、および北海道大学文学院博士課程の上村正之氏、そして私（イーホル・ダツェンコ）が出席しました。討論者として、Marko Pavlyshyn 教授（文学）や Sheila Fitzpatrick 教授（歴史）をはじめとする著名な専門家の方々にご参加いただきました。ワークショップの初日には、在メルボルン日本国総領事館より古谷徳郎総領事にご臨席いただきました。

ワークショップのプログラムは、歴史学、言語学、文学研究の分野に焦点を当てた5つのパネルで構成されました。とくに、現代のロシア・ウクライナ戦争の課題、20世紀後半から21世紀初頭にかけての移民問題、そして戦争や移民の状況下における民族アイデンティティの維持といったテーマに重点が置かれました。本ワークショップの主軸はウクライナ問題でしたが、報告内容はより広範な領域をカバーしており、東欧の他民族の経験と比較しながらウクライナの状況を検討する機会となりました。日本代表団による報告は3つのパネルで行われ、討論者から高く評価されました。

第1パネルでは、北東アジアおよびオーストラリアにおけるウクライナ人とバルト人の移民運動が焦点となりました。特に、イリーナ・スクビイ氏（メルボルン大学）による、

1970年代のメルボルン人権擁護委員会がウクライナの反体制派支援において果たした役割についての報告は、非常に示唆に富むものでした。この活動は政治囚を救済しただけでなく、1991年のウクライナ独立に対する国際的な支持の基盤を築くことにも繋がりました。

第2パネルでは、歴史・言語学的記憶の問題が取り上げられました。野町素己氏は、ベラルーシにおける「西ポリーシャ文語」プロジェクトの興隆と衰退を分析し、同マイクロ言語の標準化は最終的に結実しなかったものの、その運動が地域記憶の中に重要な文化的遺産を残したことを指摘しました。また、博士課程の上村正之氏は、ウクライナ文化に対する帝國的な否認（特にベリンスキーによる批判）が、いかに逆説的にコサックの歴史的記憶に基づく独自のウクライナ的アイデンティティを強化する触媒となったかを明らかにしました。

第3パネルでは、第二次世界大戦後のオーストラリアにおける東欧コミュニティの形成に関する報告が行われました。特に、オーストラリアへ亡命した旧ソ連側の協力者（コラボレーター）たちの、戦後の複雑かつ知られざる運命に焦点を当てたオレグ・ベイダ氏（メルボルン大学）の報告は非常に興味深いものでした。報告者は、西側諸国によるソ連闘争において、ロシア人反ポリシェヴィキ勢力は適切な政治的地位を確立できず、大国の「チェスの駒」に留まったと指摘しました。

第4パネルでは、ディアスポラの言語問題がテーマとなりました。ダツェンコ研究員は、ソ連下のウクライナでは禁止された1928年のいわゆる「ハルキウ正書法」が、オーストラリア、米国、欧州のウクライナ人ディアスポラによって、民族的抵抗の象徴および言語的伝統を継続させるためのツールとしていかに積極的に保持されてきたか、その経緯を報告しました。

最後に、第5パネルでは、ロシアによるウクライナ侵攻をめぐる現代的課題と、避難民の運命に関する報告が行われました。青山陽子氏の報告は、占領地におけるウクライナ人に対するロシア連邦の国家政策戦略を取り上げました。ロシア当局は併合を正当化し全体主義的支配を強化するために、「伝統的価値観」や「共通の歴史」というイデオロギーを利用しています。同報告では、ロシアが閉鎖的な「国家文明」へと変貌を遂げ、移民や占領地の住民を体制維持のための「資源」としてのみ扱っている実態が浮き彫りにされました。

パネル報告に加え、プログラムにはメルボルン大学で執筆された修士論文および博士論文の発表も含まれていました。本ワークショップの目玉の一つは、マルコ・パヴリシン氏とイリーナ・スクビイ氏の案内によるビクトリア州ウクライナ人コミュニティ・アーカイブの視察でした。このアーカイブは、20世紀後半のメルボルンにおけるウクライナ人生活の拠点となった「ウクライナ・ハウス」内に設置されています。

日本代表団によるメルボルンのウクライナ人コミュニティへの理解は、ワークショップ以外の時間にも深められました。訪問先として聖使徒ペトロ・パウロ・ギリシャ・カトリック大聖堂を選んだのは、



ワークショップ参加者全員と



ボリス・グチャク府主教と一緒に

ウクライナ・ギリシャ・カトリック教会（UGCC）が、19世紀のガリツィアにおけるウクライナ民族意識の形成と、20世紀の国外における精神的アイデンティティの保持において主要な役割を果たしたからです。メルボルンの大聖堂は単なる信仰の場ではなく、オーストラリアにおけるウクライナの伝統の継続性の象徴でもあります。聖堂の見学中、私たちは幸運にもUGCCの3人の重要人物に出会う機会を得ました。ちょうどこ

の時期、メルボルンでシノド（聖公会議）が開催されていたためです。一人目はUGCCの首座司教であるスヴァトスラヴ・シェヴチュク大主教。二人目は、オーストラリア全土で唯一のウクライナ系枢機卿であり、2025年のコンクラーベにも参加したミコラ・ビチョク司教。三人目は、現在ウクライナで最もランキングの高い私立高等教育機関であるウクライナ・カトリック大学の創設者兼元総長、ボリス・グチャク府主教です。グチャク府主教はUGCC史研究の第一人者の一人でもあり、彼の学術的著作は東欧の宗教的・文化的発展を理解するための基礎となっている点は特筆に値します。

ワークショップへの参加に加え、ダツェンコ研究員は世界ウクライナ人会議副会長（Ukrainian World Congress）のナタリヤ・ポシワイロ＝タウラー氏と面会しました。同氏からは、オーストラリア大陸におけるウクライナ人教育の歴史と現状について詳細な説明があったほか、東アジアおよび東南アジア諸国におけるウクライナ人コミュニティの最新状況についても情報共有がなされました。過去3年間にわたる全面戦争の結果、台湾、香港、シンガポールなど、これまでウクライナの民族活動の拠点ではなかった地域にも新たな組織が誕生しています。また、インドネシアの複雑な状況についても報告されました。そこには活動的なコミュニティが存在するものの、公式な団体登録には至っていません。これは、ウクライナ人コミュニティが国内における反露運動の拠点となることを懸念する現地当局の警戒感に起因しています。

オーストラリア滞在中、同国で出版された貴重な書籍がセンターの図書室に寄贈されました。マルコ・パヴリシン教授からは希少価値のある『Encyclopedia of Ukrainian Diaspora in Australia』、ナタリヤ・ポシワイロ＝タウラー氏からは1932-1933年のウクライナにおける飢饉に関する書籍『Genocide in Ukraine』が贈られました。また、ボリス・グチャク大主教も自身の著作の一部をセンターの図書室へ送る意向を示されました。

ウクライナに関するテーマの重要性が世界的に高まる中、本ワークショップの意義は、メルボルン大学との協力関係のさらなる拡大や、他の国際的な研究機関との連携強化の妥当性を裏付けるものとなりました。なお、本ワークショップの成果および発表内容は、メルボルン大学の特別論文集『War, Migration, and Identity』に学術論文として掲載される予定です。

[ダツェンコ]

## 専任・助教・非常勤研究員セミナー

年度末が近づき、研究員セミナーが活発に開催されました。

2025年12月19日 長縄宣博

報告：①長い20世紀のはじまり：ロシアと中東における帝国、人道、抵抗

② “Introduction: Tatars in a Eurasian Crucible,” in Shinmen Yasushi, Diliara Usmanova, Hamamoto Mami, Allen Frank, eds., *Tatar Diaspora in Modern Eurasia: Connection, Interaction, Transformation* (Tokyo: Toyo Bunko, 2026) forthcoming.

コメンテータ：池田嘉郎（東京大学）

二つのペーパーが提出され、『歴史学研究』に寄稿された①は、近年の「長い20世紀」研究を紹介しながら、その最初の半世紀にロシアと中東を跨いで生じた地殻変動について考察するものです。通説的な時代区分に潜む欧米中心の前提を問い直すために、従来の20世紀論には決して登場することのないロシア内地のムスリム社会をロシアと中東の接合面に置いて複数の地理上の中心を設定し、そこから見える像の相関から時代の重層性を再構築することが目的とされます。

②は論集の序文として、近現代の「ユーラシアの坩堝」とされる地殻変動のなかでヴォルガ・ウラル地方のタタール人が果たした役割と位置を掘り起こし、総合的に解明する初の試みを紹介します。タタール人がロマノフ朝とソ連帝国、清朝と中華民国、オスマン帝国、ナチス・ドイツおよび日本帝国といった隣接地域・諸国家と接触した境界的空間を探り、その移動を、国家の垂直的な介入と、帝国支配からの解放を求める水平的探求との弁証法への地球規模の取り組みの一例と位置づけています。

コメンテータからは、ムスリム・ネットワークに視座を据えることで20世紀史をこれまでにない側面から見る研究として1960年代の先行研究との比較が行われ、リベラリズム・ソ連民族政策についてのより多面的な理解が評価されました。続いて、長い20世紀の時代区分、とくに1970年代をそこにどう位置づけるかという問いや、欧米中心の世界史を転覆しようとするあまり、リベラリズムの評価が列強支配の道具として一面的になっているのではないかと、重要な問題提起が行われました。

フロアの関心もリベラリズムに集まり、その主体を欧米と定義することで見えなくなる主体性があるのではないか、ビスマルク体制の破綻等歴史的に見てリベラリズムも一枚岩ではないのではないかといった問い、また現状をリベラリズムの終焉ではなく担い手の交替と見る見方が提起され、リベラリズムとイコールとされてきた世俗主義との関係を問う質問もありました。②については、タタールを集団として理解する上での枠組についての質問がいくつか提出され、コメンテータからは、報告者のタタール理解をコミンテルンの果たした役割をより多角的に論ずる近年の研究動向に重ね合わせる興味深い補足がありました。[安達]

2026年1月13日 服部倫卓

報告：①ロシアの貿易統計に見る東方シフトの虚実

② 軍事ケインズ主義とプーチノミクスの行方

コメンテータ：新井洋史（新潟県立大学）

ペーパー二本が提出され、①はウクライナ全面侵攻が四年目を迎えるにあたり、この間のロシアの変容を対外政策の面から検証することを意図した論考でした。2022年以降のロシア国内における研究者らの議論を紹介しつつ、ロシア税関が発表している2023年までの商品貿易統計によって実態を検証することで、ロシアの「東方シフト」を多角的に分析し、対中一極依存の顕在化を指摘しています。②はプーチン体制の経済路線の最大の特徴として今日再び注目が集まっている「軍事ケインズ主義」を解説するとともに、その視点から、ウクライナ侵攻後のロシア経済の実情と今後の行方を概観するものです。

コメンテータからは①を中心にコメントがあり、存在しないと思われていたロシア公式の貿易統計をコメンテータがセンター図書室で発見し、報告者と共有した経緯が明かされつつ、それをういた分析が高く評価されました。一方で東方シフトについては、その歴史やこの語が意味する地域、ロシア国内のその状況についての問いが出されるとともに、対中一極依存の実情についてさまざまな角度から問題提起が行われました。

フロアからも東方シフトに大きな関心が寄せられ、「東方」がロシアの国内外でもつ意味の違いに注意が払われつつ、現状は実質的に中国シフトになっているという指摘がありました。さらに貿易が一国に集中することの経済安全保障上の意味を世界的な文脈で問う質問が相次ぎました。また貿易の個別品目に目を向けると非友好国の存在感も無視できず、制裁の効果や、日本とくに韓国のロシア経済との距離感を問う質問もありました。②については、戦時経済との類似性を指摘しつつ、軍事ケインズ主義という用語を用いる意義についての質問がありました。

時期的な事情もあり参加者数こそやや控えめでしたが、田畑名誉教授も参加され、時宜を得たトピックについて濃厚な議論が行われました。[安達]

2026年1月20日 仙石学

報告：2020年代のヴィシエグラード政治：COVID-19とロシアのウクライナ侵攻後の変容  
コメンテータ：東野篤子（筑波大学）

このペーパーは、COVID-19の感染拡大と、ロシアのウクライナ侵攻の2つの要因を取り上げ、東欧のいわゆるヴィシエグラード諸国（チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキア）4カ国の間に方向性の相違を生じさせることとなったとして、各国の政治に対して与えた影響について同時期の選挙から検討するものです。

コメンテータは、この二つの要因を国際安全保障上の問題として同時に取り上げたオリジナリティを高く評価しつつ、単に脅威だけではないCOVID-19以降の変化のより広い様相や、これらの国々のウクライナやEUとの関係についてさらに議論を深めました。ヴィシエグラード諸国をまとめるとして理解することに対する問題提起がなされるとともに、日本での中東欧研究の重要性の高まりが強調されました。

「中東欧」や「ヴィシエグラード諸国」という枠組み、そのEUとの関係については、フロアからの関心も高く、質問やコメントが集中しました。そのほかポピュリズム、トランプとの関係、ワクチン導入、移民政策といった現代の最重要問題に関連した議論があり、この地域から国際情勢を見ることの意義が改めて浮き彫りになる機会となりました。[安達]

2026年1月26日 岡部克哉

報告：辛亥革命期のモンゴル問題と日露協調：“消極的”協調の維持と“積極的”協調の限界  
 コメンテータ：シュラトフ ヤロスラブ（早稲田大学）

このペーパーは、慶應義塾大学出版会から刊行予定の、博士論文に基づいた単著に収録予定のものです。清の支配下にあったモンゴルの独立運動とロシアの介入が日露関係に及ぼした影響は従来の研究では詳しく論じられてこなかったと指摘し、その影響を対中政策の問題も交えながら検討します。

博士論文の審査委員でもあったコメンテータは、日露関係史の研究を1910年以前と以後に分類し、後者にフォーカスする日本の研究の系譜に報告者の業績を位置づけつつ、新しい資料や、“積極的”協調と“消極的”協調といった新しい概念の導入、モンゴルを取り入れて日・中・モンゴル関係史にも貢献しうる問題設定等の貢献を評価しました。一方で、日露双方の軍・外務省内部でのアクターごとのより細かい議論を求めるコメントや、先行研究との関係を問う質問が出されたほか、南北満州の資源をめぐる当時の認識から日露の対中政策の中長期的な異同まで、緻密な議論が交わされました。

フロアからは、日露両帝国の境界地域としての中国やモンゴルのエージェンシーや、その日露外交との関係に注目する質問が多く出されました。議論は東アジアを超え、日英同盟・英露協商をはじめとするヨーロッパ、アメリカの情勢に広がるとともに、経済・貿易といったファクターについて問われる場面もあり、伸び盛りの若手歴史研究者の研究にフロアも刺激された様子でした。[安達]

2026年1月26日 アントネンコ ヴィクトリア

報告：Territorial Changes in the Sakhalin Region After the Second World War and the Development of Soviet–Japanese Trade

コメンテータ：Samuel J. Hirst (Bilkent University)

このペーパーは博士論文以降の研究成果を反映したもので、研究分担者を務める科研費プロジェクトのために執筆されました。バルト諸国やポーランド東部の併合、中東欧、中国や北朝鮮の一部の占領に比べ、第二次大戦後の樺太と千島列島のサハリン地域への編入がソ連にもたらした経済的利益は従来十分に研究されてこなかったと指摘した上で、四十年にわたる日本の樺太統治時代に形成された産業がサハリン地域における日ソ貿易をどのように形作ったかを跡づける内容です。モスクワ・サハリン・東京でのアーカイブ調査の成果が盛り込まれています。

コメンテータからは、日ソ双方の資料を用いた問題設定や事例分析が高く評価されました。専門であるトルコの事例が参照されつつ、サハリン経済をソ連の国内経済に組み込むためのソ連との新しい絆と日本との古い絆への投資の実態や、ソ連においてサハリン開発が持った（経済的利益にとどまらない）政治的な含意について問いが投げられました。またサハリンの貿易をソ連の経済全体や戦後の国際経済の変化、とくに東アジアのポスト帝國的状況といったより広い文脈に位置づけてその意味や独自性を明らかにするという比較研究の提案がありました。

フロアからも、報告者とコメンテータとの議論に触発された質問・コメントが続き、植民地支配と経済発展を関係づけるナラティブ、サハリンの経済発展の時代区分、東アジアにお

いて新たに生まれた共産主義国家をサポートする上でのサハリン経済の役割、日ソの貿易統計のずれの原因、戦争が貿易に与えた影響等、幅広い議論が行われました。コメンテータからは論文のブラッシュアップへの協力も約束され、センターの外国人招へい教員プログラム（FVFP）を経験した国際的な研究者によるサポートを受けて若手研究者がさらにレベルアップする、明るい未来の見える回となりました。〔安達〕

## 研究会活動

センターニュース 177 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。〔編集部〕

**10月31日 Survival Strategy Study Seminar** Alexandr Akimov (Griffith University) “Uzbekistan’s Transition to Renewable Energy: The Analysis of Major Developments and Challenges”

**10月31日 Book Discussion** Norihiro Naganawa (SRC), Peter Holquist (University of Pennsylvania), Sarah Slye (Ili State University), Samuel Hirst (Bilkent University / SRC), Naira Sahakyan (American University of Armenia) “Dreams of Emancipation: A Transnational History of Revolutionary Russia”

**11月3日 Breakout Session organized by SRC & IREEES as part of the 28th Hokkaido University–Seoul National University Joint Symposium** “Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region”; Session 1: Theoretical and Conceptual Inquiry into Care and Empathy in Slavic-Eurasian Region: Jonghyeon Lee (Kyungpook National University) “Biopolitics and Care in Soviet-Russia,” Youkyoung Hwang (IREEES) “The Problem of Care in Early 20th-century Russian Literature,” Daisuke Adachi (SRC) “Melodramatic Imagination as Cultural and Social Power in the Slavic-Eurasian Region,” Heeseung Choi (IREEES) “Comparing the Concept of Care in Russian-Speaking Countries and Korea”; Session 2: Care and Social Communities in Slavic-Eurasian Region: Chieko Hirota (SRC) “Handwork Enhances Self-Affirmation: Forms of Care in the Kazakh Community in Mongolia,” Yoomi Jung (IREEES) “The Current State of Multicultural Education in Korean Nursing Colleges,” Riki Kanno (SRC), “Not Great but Patriotic War: Care for Veterans and Memories for the Next Generations after Soviet-Afghan War in Russia”

**11月4日 特別セミナー** Rodolfo Basile (JSPS, Kyoto University) “Beyond Locative and Existential Constructions: The Grammar of Locating Things in Space”

**11月7日 CGR/EES 実社会共創セミナー（長崎）** 黒木英充（長崎大学／東京外国語大学）「ジェノサイド：イスラエルの行動とテロリズム言説」

**11月11日 Survival Strategy Study Special Lecture** Yakov M. Rabkin (University of Montreal) “Violence in Ukraine and Gaza: Causes and Consequences”

**11月13日 SRC Special Seminar** Valentyna Romanova (Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO)) “Foreign and local engagement in Ukraine’s resilience and recovery during wartime”

**11月14日 北海道スラブ研究会** 堀田主 (SRC) 「ゴルバチョフの「欧州共通の家」構想：その限界と可能性」、Viktoriia Antonenko (SRC) 「第二次世界大戦後のサハリン州を事例としたソ連の対外貿易政策の再検討」

**11月17日 客員研究員セミナー** 金成浩 (琉球大学 / SRC) 「『非政治的』空間の政治化：オリンピック・ボイコットを通じてみる米ソ冷戦と東アジア」

**11月17日 SRC Seminar** Libor Martinek (University of Wrocław) “Laština Óndry Lysohorského – básnický idiolekt, nebo mikrojazyk?”

**11月19日 SRC Seminar** Viktor Savić (University of Belgrade) “Genesis and Early Development of Serbian Written Culture (9th–12th Century)”

**11月26日 CGR/EES 実社会のための共創研究セミナー (長崎)** 池直美 (北海道大学公共政策学大学院) 「空間と時代を超えた女性たちの物語：戦争、ジェンダー、移動を手掛かりに」

**11月26日 SRC Seminar** Олександр Тараненко (Інституту мовознавства ім. О. Потебні) “Зміни у співвідношеннях між тенденціями до аналітизму / до синтетизму на межі XX–XXI ст. (українська мова на загальнослов’янському тлі)”

**11月29日 生存戦略研究セミナー** 「蝕まれるロシア：経済と財政の持久戦」 服部倫卓 (SRC) 「イントロダクション：国防費に圧迫されるロシア経済・財政」、日臺健雄 (和光大学) 「ロシアの戦費を支える財政メカニズム：国民福祉基金と財政ルールを中心に」、田畑伸一郎 (北海道大学)・横川和穂 (神奈川大学) 「戦時下ロシアの財政構造：地域財政への影響を検証」、溝端佐登史 (京都大学) 「ロシア経済をめぐる政策論争を考える：Warfare vs. Welfare」

**12月3日 SRC Seminar (Book presentation on the history of Soviet Uzbekistan)** Beatrice Penati (University of Liverpool) “To Feed and to Mobilize: Land Reform and Agricultural Change in Early Soviet Uzbekistan”

**12月7日 International Workshop (Tokyo)** “Justice and National Interests in a Shifting World Order: Against the Backdrop of the Russo-Ukrainian War” Maria Mälksoo (University of Co-

penhagen) “Memory-political deterrence à la Russe,” Alicja Curanović (University of Warsaw) “Be Careful What You Wish Cause You Just Might Get It. Russia’s Justice Claims and Its Rapprochement with the Global South,” Selbi Durdiyeva (Nottingham Trent University) “Victim-centred Accountability and Justice during Ongoing Armed Conflict: Lessons from Ukraine,” Marek Kornat (Institute of History, Polish Academy of Sciences) “Poland in the International Relations of the 20th Century,” Hakan Yavuz (University of Utah) [online] “The Role of Religion in the Civilizational State: The Case of Turkey,” Miras Zhiyenbayev (Maqsut Narikbayev University) “Securing the New Resource Frontier: Critical Minerals in an Era of Great-Power Rivalry”

**12月15日 International Research Workshop** “Inequality, Social Welfare, and Robustness of Socio-Economic Systems in Russia and CIS”; Session 1: Inequality and Social Welfare in Russia and CIS: Vasily Anikin (HSE University) “Inequality and Poverty in Russia in the 2000s” Vladimir Kozlov (Nazarbaev University) “Differences between Generations in the Subjective Vision of the Economic Situation: A Comparative Analysis of Russia and Central Asia”; Session 2: The Robustness of Socio-Economic Systems: Satoshi Mizobata (Kyoto University) “How Robust is Russia’s Socio-Economic System under Economic Sanctions?,” Kazuho Yokogawa (Kanagawa University) “How Robust is Russia’s State Finance under Economic Sanctions: From A Regional Perspective,” Victor Gorshkov (University of Niigata Prefecture), “Strategic Adaptations of Russian Banks and Companies in Managing Cross-border Payments”

**12月17日 北海道中央ユーラシア研究会昼食懇談会** 諫早庸一 (SRC) 「ライブニッツ東欧歴史文化研究所滞在記」

**12月18日 北海道中央ユーラシア研究会第152回例会** 櫻間瑛 (大阪大学) 「ロシアの戦争とタタルスタン：現地新聞の分析から」

**12月20日 長崎大学グローバルリスク研究センター国際シンポジウム (長崎)** 「リスクと国際社会」 セッション1「リスクと未来：予測不能の時代を考える」：大平徹 (名古屋大学) 「予測と予兆：未来はどこまで読めるのか」、寺田ゆき (長崎大学) 「リスクに介入する科学と政治を考える」、葉柳和則 (長崎大学) 「スイスの「民間防衛」、あるいは小国のリスクヘッジ」；セッション2 “Climate Change and Risk”: Nanda Kumar Janardhanan (Institute for Global Environmental Strategies) “Climate and Energy Transition in the Asia Pacific: Interlinked Dimensions,” Nhan Le (Australian National University) “Regulating the Ranks: How Employment Protection Laws Shape CEO Compensation”；セッション3 “Emerging Risks and Challenges”: Anna Petrig (University of Basel) “Technologies and Risks,” Kazutaka Oka (National Institute for Environmental Studies) “Climate change impacts on health and adaptation measures”

**12月22日 SRC Seminar** Jan Maksimjuk (Independent Scholar) “Pudlaška mikromova: Osnovny problemy pravopisno-hramatyčnoji standartyzaciji”

**12月23日 CGR/EES 実社会のための共創研究セミナー（長崎）** 青島陽子（SRC）「現代ロシアの移民政策」

**12月24日 SRC Seminar** Isidora Bjelaković (University of Novi Sad) “From Zemna Kruška and Grundbirn to Krompir: A Brief History of the Serbian Terminology in the 19th Century”

**12月25日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第11回** 岡部芳彦（神戸学院大学／在神戸ウクライナ名誉領事）「ウクライナ名誉領事が見た大阪・関西万博始末記」

**12月26日 公開講演会** 安達大輔（SRC）「プーチン時代の文化をどう読むか：メロドラマとアイロニーの視点から」

**1月5日 SRC Seminar** Irena Janyšková (Czech Academy of Sciences) “Этимологический словарь старославянского языка: история – современность – источник вдохновения”

**1月7日 シンポジウム** 「ロシアの作曲家と故郷：ラフマニノフ、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ サイモン・モリソン教授とともに」 菊間史織（尚美学園大学）「故郷と異郷の間：プロコフィエフの場合」、神竹貴重子（一橋大学）「古儀式派のロシア音楽観：ボガテンコによるラフマニノフ批評」、Simon Morrison（プリンストン大学）「マルガリータと巨匠：ショスタコーヴィチの二番目の結婚、コムソモール、雪解け」

**1月13日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第12回** 新井洋史（新潟県立大学）「地政学リスク時代の国際物流：ユーラシア鉄道輸送の現在地」

**1月14日 CGR/EES 実社会共創セミナー（長崎）** 郝洪芳（ミシガン大学）「戦争・ジェンダーと越境移住：お見合い結婚でブラジルに移住した日本人女性たちの物語」

**1月15日 CGR/EES 実社会共創セミナー（長崎）** 山下範久（立命館大学）「non-human turn からリスク社会論を再考する」

**1月16日 SRC Survival Strategies Studies Seminar** Tristan Kenderdine (Future Risk/Hansa Press) “Exporting China's Domestic Security Architecture to Central Asia: Institutional Integration of Security Mechanics”

**1月23日 北海道中央ユーラシア研究会第153回例会** 和崎聖日（中部大学）、木村暁（東京外国語大学）「進化と変異のシャマニズム：映画『交霊とイスラーム』から考える」

**1月28日 SRC Special Seminar** Yuliya Dzyabko (Ibaraki Christian University) “Does Language Matter? Language Attitudes and Ideologies Among Displaced Ukrainians in Japan”

**1月29日 北海道中央ユーラシア研究会第154回例会** 王雨寒（北海道大学文学院博士後期課程）「劇場としての国境：中国 - カザフスタン国境経済協力区（コルガス国際国境協力センター）の事例に基づく文化人類学的分析」

**2月2日 客員研究員セミナー** 塩谷昌史（大阪公立大学）「第1回ロシア国勢調査（1897年）に従事した調査員の役割について」

**2月3日 UBRJ/EES 実社会のための共創研究セミナー（共同利用共同研究拠点プロジェクト型研究成果報告会）** 樫本真奈美（同志社大学）、小手川将（東京大学大学院博士課程／映画作家）「継承される記憶の地層：「北方四島」をめぐるオーラル・ヒストリー」

**2月5日 SRC Seminar** Mate Kapović (University of Zagreb) “Languages are Always Political : The Case of Former Yugoslavia and „Serbo-Croatian””

**2月9日 研究報告会（東京）** 「戦争が変える国際安全保障と経済：欧州から北極へ広がる戦略空間」 第1部「ロシア・ウクライナ戦争と国際安全保障」：小泉悠（東京大学）「北極点から見るロシア・ウクライナ戦争」、鶴岡路人（慶應義塾大学）「NATOは何が変わったか」、服部倫卓（北海道大学）「戦争を支える経済、戦争に耐える経済」；第2部「新たな地政学・地経学の焦点としての北極」：大西富士夫（北海道大学）「三正面化する北極域の安全保障環境」原田大輔（JOGMEC）「ウクライナ戦争の背後で動く米露北極エネルギー協力」、大塚夏彦（北海道立オホーツク流氷科学センター）「ロシア北方航路のいま」、安達祐子（上智大学）「ロシア北極政策のキープレイヤーとしてのロスアトム」

**2月12日 SRC Survival Strategies Studies Seminar** Marko Pavlyshyn (Monash University) “‘Ukrainian News / My Dead Father Orders Me / To Pay Attention’ Ukrainian Literature in Australia 1948-2025”

**2月16日 Tobunken Seminar (Tokyo)** Nicola Di Cosmo (Institute for Advanced Study, Princeton / SRC) “‘The Role of Climate in the History of the Mongol Conquest’”

**2月19日 CGR/EES 実社会のための共創研究セミナー（長崎）** 井上岳彦（大阪教育大学）「流浪のカルムイク：戦間期における移動と帰属意識」

## 第6回 マトリョーシカ・インタビュー

服部 倫卓 教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

第6回目は、多くのメディア出演でもご活躍されている服部倫卓教授にお話しを伺いました。



### 変わるロシアの、あるがままを見る目でやりたい

—先生のご専門はロシア・ウクライナ・ベラルーシの経済・政治で、研究では特に当該地域の現地調査をライフワークとしてきたとのこと。ウクライナ戦争以降、この地域に渡航できないということで、研究活動には大きな打撃があったかと思いますがこの困難にどのように対峙してきたのでしょうか。

現地調査ができない状況はコロナ禍の時から続いています。私は前職の貿易促進団体にロシアをはじめとする旧ソ連諸国との経済関係促進のための仕事をしており、1年に必ず1・2回は現地に行って調査していました。現地のカウンターパートや行政府との正式な面談に加えて、自分でその国に滞在することで肌感覚で実情をつかむというのを大きな目的としていました。首都だけでなく地方にも足を延ばすようにしており、ロシアに関して言えばコロナ前までに、83ある連邦構成主体のうち53地域への訪問経験がありました。残り30地域だったので、「このペースでいけば、ロシアの全地域を回ることも夢ではない」と思っていました。ところがコロナと戦争で6年間の足踏みを余儀なくされたわけです。

—経済的な効果や、逆もしかりで不況とされているものが、どういった実体を伴って行き渡っているかを確かめるということでしょうか。

前の職場にいたときのロシアは日本にとっての経済パートナーだったので、日本企業にとっては、どの地域で工場を建てるか、どの地域でどういうビジネスチャンスがあるか、そういう情報のニーズがありました。なので、自分の足で取材をしてそういった日本のビジネスマン向けに発信をしていましたし、首都だけではわからないいろいろな地域からの眼差しとしてロシアを捉えるというのを私の研究活動の基本にしていました。今は日本とロシアの関係性が全く変わってしまって、経済制裁でどうにかウクライナでの戦争を終結に導けないかと国際的に連携していて、実際にそれが効いているのかとか、今のロシア国民のリアルな暮らし向きはどうかということを目で見たいという思いがずっとありました。この6年間は報道等を通じて間接的に情報を得ていましたが、やはりそれでは覗き穴から限られた視野だけに見るような解像度の低い情報になってしまいます。やはり自分の目で見て人々と…別にエリートと面談しなくても、日常的に会う人々、例えばタクシーの運転手や商店の販売員と会話してみたり、そういったことで今のロシアのリアルというのを掴めるので。結局、昨年9月に個人的な旅行として、6年振りにロシアを訪問してきました。

—リアルを見定めたいというアカデミックとしての視座は変わっていない一方で、平成元年から今までの間にロシアを取り巻く状況が変わっていったということですね。ビジネスチャンスといっ

た日本社会にとってプラスの経済的価値がけん引する状況下でアカデミックの視座が重用されていたという時代から、今はまさに経済制裁の対象としてそれが効いているか、敵陣営をリサーチするという観点からアカデミックの視座が引証されるように変わったと。

それはおっしゃる通りですね。そもそも私は、経済の研究を通じてロシアとのビジネス関係を促進しようというような関心からロシアのことを始めたわけではなくて、むしろ最初の発想は敵国研究に近いというか。私が大学生だった頃はまだ冷戦構造が残っていて、80年代の前半にかえってそれが厳しくなるような時代があったんです。そうした時代背景でロシアのことを勉強しようと思ったので、今は原点に戻ったという感じです。もちろん今でもロシアがまともな状態に戻ってきて、また日本のパートナーになってくれれば一番良いのですが。おそらく私が現役でいる間はプーチン体制はずっと続いて、そうである限りいい方向での変化はなかなか期待できないと思います。そうすると自分の役割は、残念ながら我々とは完全に別の陣営になってしまったロシアという国のありようを、現実があるままにウォッチするということだと思っています。

## スラ研のアウトリーチを担う

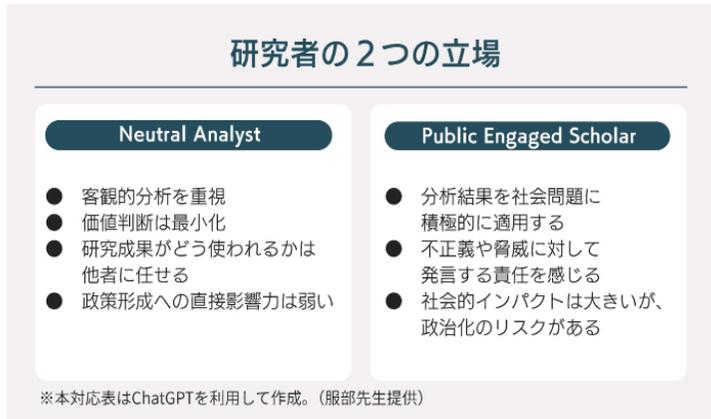
—先生の研究対象は地域としてはロシア・ウクライナ・ベラルーシで、分野としては経済ですがその「今の」状況をウォッチされているというところに特徴がありますよね、スラ研には多様な時間軸を研究対象にしている研究者がいることを考えれば。「今」を扱う上では、地域の特殊性もある中で、政局やフェイクとがないまぜになった情報を対象にすることになるかと思いますが、それをどうやってかわしながら研究を担保しているのでしょうか。あるいは経済という切り口はフェイクに強いのでしょうか。

私の専門は経済と言っていますけれども、いわゆる純粋な経済学ではありません。経済をめぐる国際関係・国内の力学といった、題材・争点としての経済という立ち位置です。いわゆる経済安全保障という言葉がありますよね。例えばロシアはエネルギー大国なので、自国の石油や天然ガスを武器として使っているのではないかとといった論争はずっとありましたが、戦争前のロシアのグローバルマーケットにおける行動というのは、今のトランプ政権みたいに国際秩序を自ら破壊しに行くようなものではなくて、模範的とまでは言いませんがWTOに入れば意外とそのルールには従うし、旧ソ連の近隣諸国への対応を別とすれば、必ずしもエネルギーを武器としていたわけではありませんでした。しかし戦争が始まってしまうと、ヨーロッパとの関係ではもはや天然ガスを武器化していることは明白で、それだけでなくウクライナの穀物輸出を妨害して揺さぶりをかけるなど、明らかに経済が政治の武器あるいは目的となり、経済と政治がないまぜになって進行する傾向が特にロシアにおいては強まっています。そうすると、私の注力する研究アプローチとしては経済安全保障ということになります。今、日本を含む諸外国がロシアに経済制裁を適用しているので、ロシアはその中で如何に生き残りを図るか、自国の資源を武器化して立ち回るかとか、経済制裁の効果はどれくらいあるかとか、そういった側面が、今私が研究している経済の主な中身ですね。

これは結構苦勞の多い研究分野だと自分では思っているんですけどよね。文学であれば、例えばドストエフスキーを読めばそれがずっと自分の知的資産として残るでしょう。歴史学も、先人が築き上げてきた研究も自分の研究もどちらも蓄積していける分野だと思うんです。それに対して、経済及びそれをめぐる国内・国際の政治的軋轢というのは日々上書きされていくもので、私の感覚で言うと、日々膨大な情報フローとの格闘が不可避です。別に文学・歴史が簡単で我々が

大変とかいう意味ではなくて、情報との向き合い方が大分違うということです。ご質問にあったフェイクへの向き合い方ですけれども、ロシアが今使える武器として情報というものを非常に重視しているということは間違いないので、基本的にロシア発信の情報というのは、そもそもそういうものとして扱う、客観的に発信された情報とは捉えられないということですよ。これはどんな国のどんな国営メディア・民間のマスコミであってもその立場や思惑があって情報を発信しているわけで、ロシアだけが完全な例外ではありませんが、やはり今のロシアの場合はその政治的立場から発信していることを当然の前提にしながら、情報を吟味していく必要がありますね。私の研究分野でいうと、例えばロシアが経済統計を最近発表しなくなったりするというのがあります。ロシアはですね、都合が悪くなると数字を改ざんするというよりも、発表しなくなる傾向が強いと私は思っています。逆に言うと、発表されているデータに関してはそれなりの信憑性があるものとして扱っていい。そこに秘められているいろいろなニュアンスは注意しなければいけないにしても、こういった経済統計は割と使えるということですね。そういう断片的な情報をパッチワークのように繋ぎ合わせながら、それでも全部は埋まりませんが、何とか今のロシアという国の全体像を推察していくのが私のタスクですね。

ロシアの侵略を受けているウクライナに関して、ある種のバイアスが生じがちです。ウクライナへの感情移入が激しいあまり、その忍耐力・持続力を過剰に賞賛することが生じがちです。私も心情的には同調するのですが、こと自分の専門分野の研究や情報発信に



関しては、なるべく客観的でありたいというのが、私の立場です。ロシア・ウクライナ戦争については、対ロシア制裁と対ウクライナ支援を徹底すべきだという主張が主流で、その点は私も同意見なのですが、ともするとその主張の都合に合わせてロシアやウクライナの経済実態が論じられたりするんですよ。研究者の立場には、このような区分（上図）があるのではないかと思います。右側の立場の研究者は、自分の分析や発言を通じて積極的に世論を巻き込んだり、政府を動かして政策に反映させていこうという志向が強いと思うんですよ。別にそれが悪いという意味ではなくて、私の立ち位置としては、ロシア経済は今こういう状態ですと示すに留まると。制裁が意外と効いていないという現実があったとして、人によってはもっと制裁を徹底すべきだという捉え方をするかもしれないし、効いていないのならこの辺でもう諦めて手を打つべきという人もいるかもしれないですよ。そういう価値判断は受け手にお任せして、私はとにかくロシアの今の現実をあるがままに客観的に捉えるという立ち位置でいたい。

—先生はスラ研の中ではメディアへの露出も多いですし、アカデミックだけでなくより広い社会へもリーチするような、ブログやツイッターといった割とカジュアルな発信もされています。政治的な色付けは委ねるという立場をとった上で、研究者が実社会で果たす役割を先生はどのように捉えていますか。



基本的には日本国内のオーディエンス、具体的には経済界、一般市民の皆さん、一番身近でいえば学生に届く活動をしていきたいというのは当然あります。あくまでもロシアというのがどういう国なのかというのをなるべく曇りのない目で見て、自分の認識を社会に知ってもらい、それがやりがいのあることですね。

スラ研は時代を通じて変遷しているわけですが、例えば1980年代後半にはゴルバチョフがペレストロイカというスローガンで改革を進め、東欧でも変革の嵐が吹き荒れ、当時は日本のメインニュースでソ連や東欧の変化がトップニュース級で毎日のように詳しく報じられていて、それだけソ連・東欧の注目度が高い時代でした。そうした時代に、このセンターは社会向けの情報発信をすることでものすごく貢献していました。日本で旧ソ連、東欧の研究と言えばスラ研というような社会的認知が広がっていった時代があったんですよ。時が流れて、今ロシアとウクライナの戦争をやっている中、もちろんそれに関わるセンターとしてのいろいろな取り組みや情報発信はあるわけですが、ただ必ずしも、今のこのセンターが「ロシア、ウクライナ戦争といえばここに聞け」とか、「ここに代表的な専門家が集っている」とか、そういう認識がされているわけではおそろくないと思うんですね。もちろんうちのセンターの皆さんは国際的に非常に評価が高い研究をやっているのですが、日本社会における注目度がそれに見合っていないのではないかと感じる時があります。そうした中で、たまたま私の研究分野に対する社会的関心が高まっているご時世なので、マスコミへの露出も含めたアウトリーチに注力することで、センターに貢献できるのではないかという思いがあります。また、現在私はセンターのウェブサイトのリニューアル作業に取り組んでいるところなのですが、ウェブサイトだけでなくソーシャルメディアや YouTube の活用も含め、センターの本来の魅力が国内外に広く伝わるような体制作りを目指したいです。

—ニュートラルにリアルを提示し続けるアカデミックな立場でアウトリーチに携わる中で、社会に対してアカデミックの役割を発揮できたなという実感や、逆に誤解されているなという実感を得た場面はありますか。

比較的最近のことで言えば、ロシアのウクライナ侵攻が始まった当初ですね。「ロシアはこんな戦争を無理してやっても財政的にあと数カ月で底をついてしまう」というようなことが願望を込めた分析として日本のマスコミを駆け巡って、それを本気にした人たちが結構多かったです。当時、1日に200億ドルぐらいの軍事費を使っているみたいな全く桁違いの話が横行していて、私は当時から実際のロシアの財政運営から考えてそういう数字はおかしいということを指摘しましたが、メディア出演してそういうことを言っていたのは少数派でした。加熱して願望が先行してしまったような議論だけがずっと、何年か経った後「あれ、こんなはずじゃなかった」とみたいな状況に陥ることってあると思うんですね。ですから私はその都度、できる限り客観的な分析を提供したいです。今の状況で言えば、「まだロシアは崩壊しないでしょう、まだ何年かは持ちます」とみたいなことを言うと、それだけで親露派である・ロシアを擁護しているという評価がされてしまいます。ロシア経済やウクライナ経済をどう評価するかが、エコノミストとしての力量ではなくて政治的踏み絵みたいになってしまっていますが、私はそういうのとは距離を置きたいですね。

## あるがままを見つめる目でとらえたロシアの素顔とは？

—最後に、先生は学生時代・キャリアを通じて、ロシアが友好国となる時代、安全保障上の敵陣営となる時代の両方を経験されてきました。先生のアナリスト的な目を見た時、ロシアの素顔のポートレートはどのように映りますか。にこやかなロシア、それともいかついロシア、いかがでしょう。

プーチン自身やその体制を支えている取り巻きというのはどう考えても非常に困った人たちです。ただ、いろいろな層の人がいますよね。例えば経済官僚、いわゆるテクノクラートと言われる人たちはものすごく有能でプーチンの押し付けたいろいろな仕事をできる範囲で粛々とやっている。その一部はもうロシアを出国したり反体制派になったりしてはいますが、今ロシアに残って仕事をしている人たちは、自分たちの役割だと割り切っている範囲でロシア経済を回している。一方、庶民がどうなのかはまた別の問題で、基本的にロシアには暗黙の社会契約というのがあります。国家戦略や政治体制というのはお上が決めることであって、それに対して独裁や戦争をやめるとか言って楯つくのは今のロシアの一般国民には許されていないわけです。普通の庶民たちは自分たちの生活とか暮らし向きのことを考えるわけです。日本でもだいたい同じようなものだと思いますが、ロシアの場合にはそういう割り切った感覚が日本以上に強くあります。こうした暗黙の社会契約では、庶民の側は政治的に我慢する代わりに、国家の側は国民に生活の安定を保障しなければいけない。今、ロシアが崩壊せずに苦しいながらも一応戦争を続けているのは、そういう暗黙の社会契約が今のところ生きていて、国民生活が大きく破綻するようなことになっていないからなんですよね。これを続けられるかどうかはプーチン体制にとっての生命線、いわゆるプーチン体制について家父長主義的という言葉もよく使われますけど、その中身は何かと言えば、生活や暮らしを最低限守ってあげるといっていいでしょうね。一般のロシア国民は自分の身に直接不幸が降りかからない限り、プーチン体制とその行動を消極的ながらも受け入れて、政治的に悪目立ちして自分が迫害されたりするようなことを避けつつ、でも例えば砂糖が無くなった、卵が無くなったとか、あるいはガソリンが足りないとか、そういう生活に直結する問題が起これば、この不満を大いに表明するでしょう。これを笑顔とかしかめっ面とか一言で言うのは難しいところではありますが、日本にも本音と建前という言葉がありますよね。ロシアの場合も、指導者にもそういう本音と建前があって、庶民にもそういう本音と建前があって。各々その笑顔としかめっ面を使い分けながら状況に適応して生きている、という感じじゃないでしょうかね。

(取材：田宮 彩也香)

服部 倫卓 (はっとり みちたか)

1964年生

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授

東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業

青山学院大学大学院国際政治経済学研究科修士課程修了

北海道大学大学院文学研究科博士課程博士号取得

1998-2001年 在ベラルーシ共和国日本大使館専門調査員

2020-2022年 一般社団法人ロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所 所長

2022年 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授



## 地域研究を位置づける——サラエヴォからシカゴ、そして札幌へ

エディン・ハイダルパシッチ

(ロヨラ大学／センター 2025 年度外国人招へい教員)

2025 年春、シカゴでの日常的な学術活動の多くは、アメリカにおける高等教育への脅威の高まりへの対応に追われることになりました。トランプ政権下で、人文科学基金（NEH）や全米科学財団（NSF）といった機関が解体され、数多くの大学や地域研究センターが資金削減に直面し、多くの研究者—私自身や同僚たちも含めて—が、新たな状況への対応を迫られていました。突然もたらされた混乱に心身ともに疲弊するなか、2025 年夏に予定されていた北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）でのフェローシップは、研究に立ち返り、新たな同僚と出会うための貴重な時間になるだろうと大きな期待を抱いていました。そして実際に SRC は、研究と思索の場として実に素晴らしい環境でした。

北海道大学での滞在は、単に研究を深める以上のものを私にもたらししてくれました。新たな知的ネットワークが開かれ、地域研究や知の生産をめぐる政治性について、世界的な文脈のなかで再考する機会を与えてくれたのです。

SRC の同僚たちとの最初の会話から、さまざまな重要な論点が浮かび上がりました。新千歳空港に到着した際には野町素己先生に出迎えていただき、電車の中ですぐに「私たちの言葉（ボスニア語・クロアチア語・モンテネグロ語・セルビア語）」で会話が始まり、バルカン地域の学界に関するさまざまな話題について意見を交わしました。その後の二か月間、野町先生は私の北海道大学での滞在を、知的に刺激的で実り多いものにして下さいました。昼食やコーヒーを共にしながら、東京で立ち寄るべき書店（ロシア・東欧の本を扱うナウカ書店 など）から、最新の研究動向、さらには研究上の具体的な支援に至るまで、常に有益な助言をいただきました。先生はご自身の蔵書から、ボスニアにおけるアラビア文字使用に関する新刊書を貸して下さり、また私の研究関心に関連する日本語文献を探し出し、その内容を要約して下さることもありました。野町先生との対話を通じて、SRC が進めている国際共同研究や、バルカン研究に関わる新たな取り組み、さらには充実した教育プログラムについても多くを学びました。アメリカの大学におけるスラブ・ユーラシア研究の枠組みのなかでは、バルカン地域が中欧と中東をつなぐ「通過点」として軽視されがちですが、SRC においては決してそのような位置づけではありませんでした。野町先生による長年の取り組みに支えられ、バルカン研究は SRC の活動の中でしっかりと根付いてきたのです。

この夏、サミュエル・ハースト（Samuel Hirst）、オレーナ・パルコ（Olena Palko）、ウナ・アレクサンドラ・ベールジニャ＝チェレンコヴァ（Una Aleksandra Bērziņa-Čerenkova）の三名を同じく客員研究者として迎えられたことも幸運でした。互いの研究について学び合い、札幌周辺での小旅行の話（私の子どもたちはコンサドーレの試合や滝野すずらん公園を大いに楽しみました）を交わすことで、札幌での時間はいっそう生き生きとしたものになりました。また、SRC 事務の田宮さんの親切なご支援なくして、今回の滞在は実現しえなかったでしょう。7 月初旬の夏季シンポジウムではさらに多くの研究者が集い、青島陽子先生や安達大輔先生との対話からも多くを学びました。とりわけ、来日前から助言やメールでのやり取りを通じて私の準備を支えてくださったヤスミナ・ガヴランカペタノヴィッチ＝レジッチ先生に、ようやく直接お会いできたことは大きな喜びでした。

これらの出会いを貫く重要なテーマの一つは、アメリカ中心の国際秩序の揺らぎが、今後の国際的な学術活動や研究課題にどのような変化をもたらすのか、という問題でした。札幌に到着して最初の週には長縄宣博先生とお会いし、過去 10 年余にわたる大きな地政学的変動と地域研究の制度的枠組みとの関係について、すぐに議論が始まりました。ロシアによるウクライナ侵略は、脱植民地化や経済を含む多くの問題を再考することを研究者に迫ってきましたが、近年のアメリカ国内の政治的变化もまた、同様に地殻変動的な影響を世界に及ぼしています。長縄先生が指摘されたように一そしてそれはダボス会議で政策担当者が同様の言葉を使い始める以前のことでしたが、リベラルな世界秩序の終焉は、現在の危機に至るプロセスそのものを批判的に再検討する必要性を突きつけています。

地域研究は、こうした変化にとりわけ敏感な分野です。北海道大学 SRC の設立も、1950 年代にロックフェラー財団などが主導した、冷戦期アメリカの地域研究モデルに大きな影響を受けていました。それから約 70 年が経過した現在、アメリカの一部の大学では外国語教育が削減され、留学生数が減少し、地域研究センターそのものが閉鎖される事例すら見られます。過去数十年にわたって築かれてきた複雑な国際的ネットワークは、2020 年代に突如生じた断絶のなかで、どのように生き延びることができるのでしょうか。

そうしたなかで、長縄先生が中心となって構想された「生存戦略」研究について知ることができました。この取り組みは、「私たちが直面している世界的危機を、より広い社会に理解・説明する」ことを目的としています。同時に、SRC は重層的帝国史、言語学、境界研究、そして近年ではウクライナ研究といった既存の強みをさらに深化させてきました。とりわけ、ロシアと中東との複雑な関係性に重点を置いている点には、大きな意義を感じました。私自身、東欧と中東を結び連関を研究テーマとしてきただけに、これらの取り組みは非常に刺激的でした。さらに広い視点から見れば、この「生存戦略」は地域研究の長期的な展開とも深く関わっています。エドワード・サイードが指摘したように、オリエンタリズムは 20 世紀の地域研究を支える基盤となり、中東は知の生産をめぐる重要な論争の場であり続けてきました。SRC が目指すように、中東の歴史や社会を新たな開かれた視座から再検討することは、地域研究の将来を再構想するうえで大きな可能性を秘めています。

このような戦略的思考こそが、現在の不安定な地政学的状況のなかにあっても、SRC が研究を前進させる上で有利な位置に立っている理由だと私は考えます。SRC の発展はすでに具体的な成果を生み出してきました。アメリカでは「トランスナショナル」という言葉が二十年ほど前から流行しましたが、地域研究の制度そのものを変革するには至りませんでした。ヨーロッパ、特にドイツでは、レーゲンスブルク大学の「学際的・多層的な地域研究」部門のように、新たな試みも見られますが、これらの取り組みとは異なり、SRC は新たに設立されたものではなく、長年にわたって革新的な形で進化を遂げてきました。たとえば、キリル文字やラテン文字に加えて、アラビア文字資料の読解能力が正当に評価されているスラブ・ユーラシア研究センターに滞在したのは、私にとって初めての経験でした。このほかに、特定の研究プロジェクトを通じて多様な分野を結びつける国際共同研究の例は数多くあります。新たな理論用語を押し付けるのではなく、戦略性と柔軟性によって実質的な連携を育てていくこのアプローチは、きわめて実践的で有効だと感じました。こうした取り組みが形になっていく過程を目の当たりにできたことは、大きな刺激であり、将来再び SRC の同僚たちと共に仕事ができる日を心から楽しみにしています。

(AI による翻訳をもとに、野町が監修)



左上：夏シンポのパネルメンバーと、左下：南スラブ人のアラビア文字使用を論じる筆者、  
右：週末の礼文島訪問

## SRC でのフェローシップの思い出

オレーナ・パルコ

(バーゼル大学／センター 2025 年度外国人招へい教員)

2025 年夏の数か月を北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの外国人招へい教員として過ごせたことは私にとって非常に特権的かつ名誉なことでした。私が尊敬する多くの同僚たちが札幌での刺激的な雰囲気と豊富な学術資料に裨益していたということもあり、SRC に来ることは私の長期的な学問上の希望だったのです。

札幌に到着した瞬間から、私は細やかな歓迎と支援を感じることができました。私が到着する数か月前から、田宮彩也香さんには日本での旅程を決める上であらゆる細部に至るまで大いに助けていただきました。SRC のコミュニティに問題なく参加し溶け込めたことに關して、SRC における私のメンターでありホストである青島陽子教授に深く感謝申し上げます。札幌での短期滞在が非常に生産的なものとなったことは青島教授のおかげであり、将来の学術協力や共同研究プロジェクトの重要な基盤となりました。

SRC 独特の学際的な知的文化に浸るきっかけとなったのは、SRC 夏季シンポジウム「ユーラシアの地殻変動：過去と現在」でした。そこで私は戦間期ウクライナにおけるソ連のマイノリティ政策に関して現在進めているプロジェクトを報告しました。司会のイーホル・ダツェンコさんの下、アンバー・ニッケルさん、安齋篤人さんとともに報告したこのパネルは、

2つの世界大戦の狭間でマイノリティの置かれた地位と彼らの運命を検討するよい機会となりました。青島教授の鋭い指摘と示唆のおかげで、戦間期の東欧における重要な同時並行性や相違点、特にマイノリティ保護や歴史的連続性、マイノリティの主体性といった部分について掘り下げることができました。シンポジウムのプログラムは驚くほど豊かでしたし、日本と世界各地の同僚と出会う機会ともなりました。報告の質と射程は実に感嘆に値するもので、シンポジウムは私のフェローシップの中でも印象深い催しの一つとなりました。

SRCでの学術交流の枠を越えて、青島教授は日本におけるロシア・東欧研究の分野を紹介してくださいました。東京外国語大学本郷サテライトで講演することになったのです。そこでは報告への有意義なフィードバックをいただいたのみならず、藤澤潤さん（神戸大学）、福嶋千穂

さん（東京外国語大学）、松本祐生子さん（お茶の水女子大学）、ボグダン・パプリーさん（富山国際大学）、篠原琢さん（東京外国語大学）、ヤロスラフ・シュラトフさん（早稲田大学）といった方々が行っている革新的な研究について意見を交換する機会に恵まれました。公式と非公式とを問わず、こうした交流を通して、私は日本における東欧・中東欧研究の多様なトピックや、方法論的裾野の広さ、また実践上の課題について知見を得たのでした。

SRCは個人的な研究と執筆に集中する上で類稀な環境であるのみならず、国際的な学術交流の活気あるハブでもあることがわかりました。夏であるにもかかわらず、センターでの知的生活は驚くほど活発でした。ウナ・アレクサンドラ・ベールジニャ＝チェレンコヴァさん（リガ・ストラディンシュ大学、ラトヴィア）、ジュリー・キャシディーさん（ウィリアムズ大学、アメリカ）、エディン・ハイダルパシッチさん（ロヨラ大学シカゴ校、アメリカ）、サミュエル・ハーストさん（ビルケント大学、トルコ）、アクサナ・イスマイルベコヴァさん（ライプニッツ現代東洋研究センター、ドイツ）を含む、滞在中に出会った多くの同僚たちと刺激的な交流が持てたことを嬉しく思います。彼らとの会話から個人的に多くのものを得ることができました。この学際的経験と、これらの交流から得られた新たな地理的・通時的視座に感謝しております。また、SRCの同僚たち、とくに青島教授、安達准教授、宇山教授、長縄教授には、知識を共有していただいたことや有意義なフィードバックをしていただいたことに感謝しております。

加えて、青島教授の授業に参加する院生たちと会い、彼らの研究について知る機会がありました。ピョートル・チャイコフスキーの音楽から、ロシアにおけるアフガン退役軍人の活動、ラトヴィアの無国籍者、現代ウクライナ文学、中欧におけるルシン語の正書法確立に至る、院生たちの知的好奇心や関心の多様さは非常に刺激的なものでした。また何より、SRCでは学術的な卓越性、協同、歓迎の稀に見る結合が実際に見られました。ここはアイデアが自由に行き来し、分野と地域が橋渡しされる場なのだと思います。



銀座・歌舞伎座の前で

より広い大学の環境もまた別のレベルで刺激を与えてくれました。札幌の暑さの中では、学術活動を生産的にも楽しくもしてくれる素晴らしい設備の整った北海道大学は緑の天国だったのです。北海道大学図書館は滞在中の最大の発見の一つでした。2次文献のみならず貴重な定期刊行物が豊富に揃うコレクションはこれまで見てきた中で最も価値の高いものです。札幌ではヨーロッパの主要な図書館でさえ入手困難な資料にアクセスすることができました。ウクライナとロシアへの渡航が制限され続ける中で、札幌でこれらのコレクションを発見できたのは予期せぬ贈り物といえます。特に SRC のシェヴェロフ・コレクションは、ウクライナやソ連初期の思想史、文化史、政治史を研究する者にとって不可欠な資料として際立つものです。SRC はこれまでウクライナ研究の磁場として知られてきましたが、イーホル・ダツェンコさんのような SRC を拠点とするウクライナ専門家の仕事を通して、この評価は強まっていくでしょう。

学術的要素のほかにも、北海道各地や京都と東京への旅のおかげで、札幌滞在は忘れ得ぬものになりました。札幌では家族と過ごしていたこともあり、日本を異なるレンズから発見・経験し、日常生活の中に幾分かの洞察を得ることができました。北海道の自然や文化を見聞き、博物館や史跡を訪れたことは最高の体験でした。

札幌での時間は普通の学術的ルーティンからの貴重な小休止を与えてくれました。それは、稀に見る快適な環境で考え、書き、有意義な対話に勤しむ機会だったのです。私は深い感謝の気持ちと将来の協働への大きな期待を抱いています。青島教授との協働が続き、2026年4月のBASEES年次大会のパネルでお会いできることを喜ばしく思います。また、これが共著や今後の共同プロジェクトに結実することを期待しております。札幌で始まった対話を継続できることを心待ちにしております。

(翻訳：三栖 大明)

## ライプニッツ東欧歴史文化研究所滞在記

諫早 庸一 (SRC)

2025年8月15日から11月13日までの3か月間、今夏の夏期国際シンポジウム「ユーラシアの地殻変動：過去と現在」にも登壇していただいたマルティン・バウフ博士のお招きにより、彼が所属するライプニッツ東欧歴史文化研究所 (Leibniz-Institut für Geschichte und Kultur des östlichen Europa: GWZO) において研究滞在の機会を得ることができました。

帰国後の滞在報告のポスターにも映るように、旧東欧の中心都市の1つであるライプツィヒにある当研究所は、都市の中心街にある歴史的かつ美しいパサージュのなかに位置し、中央駅にもほど近いそのロケーションは極めて利便性が高いものでした。ライプツィヒという都市自体が、ベルリンから特急列車で1時間半ほどの場所にあり、隣接するチェコ的首都プラハにも毎日直通電車が運行されていることから分かるように、交通の要衝、特に東欧との玄関口にあります。今回の滞在で、このような場所に東欧についての研究機関が置かれていることは自然なことであると実感することができました。

ライプニッツ協会 (Leibniz-Gemeinschaft) とは、ドイツにおける多種の分野に関する非大学研究機関の連合です。そこに属するライプニッツ東欧歴史文化研究所は、中東欧の歴史と文化を、分野横断型の研究手法を用いて考究する機関であり、中東欧をメインのフィールドとしながらも、その関心は、バルカンやコーカサス、北欧にも広がっています。当該研究所は複数の研究部門を有しており、現在は「人間と環境」、「文化と想像力」、「絡み合いとグローバル化」そして「知識と参画」の4つです。この研究所は基本的には人文・社会学系の研究機関でありながら、「人間と環境」部門では、環境をテーマに歴史学や考古学を基盤としながらも、気候学や遺伝学などの研究者たちとの異分野協働研究が進展しています。私の受入教員であるパウフ博士は、元来イタリア中世史の専門家ですが、この部門に所属し、現在は中世ヨーロッパ環境史を牽引する存在です。前近代ユーラシア環境史プロジェクトを「14世紀の危機」をテーマに進めている私にとって、このテーマで編著 (Martin Bauch and Gerrit Schenk, eds., *The Crisis of the 14th Century: Teleconnections between Environmental and Societal Change?* Berlin: De Gruyter, 2020) をものしている彼との連携は願ってもないことであり、彼と膝を突き合わせて議論できたこの3か月は、とても貴重なものとなりました。

またヨーロッパへの滞在は、ヨーロッパ内部の学会への参加のチャンスを拓くものでした。2年に1度の欧州環境史学会2025年度大会はスウェーデンのウプサラ大学で開催され、そこでマルティンさんが組織したパネル“Dis/Enchanted Climate: Parallel Histories of Magic, Religion and Learned Knowledge Phenomena across the Epochs”にて報告の機会を得ました。「気候の(脱)魔術化」を主題とする当該パネルにおいて、私の報告はモンゴル時代のイランに



欧州環境史学会 2025 年度大会での  
我々のパネルの登壇者たち



ライプニッツ東欧歴史文化研究所が  
入っているパサージュの前景

建造された、当時ユーラシア最大規模のマラーガ天文台についてのものでしたが、前近代では他にもローマからビザンツ、その東方までの地域における気象魔術を対象とした報告がありましたし、近現代については、現在はロシア・モンゴル・中国・カザフスタンの4か国にまたがるアルタイ高地の気候変動や、サハ地域/ヤクーティアにおける気候変動の報道を分析した報告があり、私以上に「スラ研的」な報告に囲まれることになりました。

その後は10月に、2023年に私がオーガナイザーとなった夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14世紀の危機」を思考する」でディスカッサントを務めて下さったアダム・イズデプスキ博士（コペルニクス大学）にお誘いいただき、彼が今年度から開始する欧州研究会議助成の研究プロジェクト“A Novel Understanding of Pandemic Disease in Preindustrial Europe (1300–1800): Combining History, Machine Learning and Natural Sciences” (EUROpest) のキックオフ・ミーティングに参加させていただくことができました。これは、6年で総額17億円を超えるメガ・プロジェクトであり、その主目的は、気候学・生物考古学・古生態学・遺伝学・歴史人口学・疫病学・文化史学といった学問分野の総合によって、産業革命以前、1300年から1800年に至るヨーロッパにおける、ペストを中心とした感染症の歴史の刷新を図るといふ、極めて野心的なものです。多分野横断的な——かつ個々の分野の最前線の！——議論を、コペルニクス大学が位置するポーランドのトルンという世界遺産の都市にて堪能することができました。

また今回の滞在は旧友たちとの再会の機会でもあり、新たな友人を得ることのできた機会でもありました。私はイェルサレム・ヘブライ大学でポスドクを2年半ほど務めましたが、その時のプロジェクト仲間たちは今や世界の各所で活躍しています。ベルリンではマックス・プランク科学史研究所で研究員を務めていた楊巧博士と再会することができ、現在はボン大学で教鞭を執るイーシャーヤフ・ランダ博士も、ライプツィヒまで来てくださいました。また、私と同じく招へい研究員としてライプニッツ東欧歴史文化研究所に来ていたアンドレア・キシュ博士（ウィーン工科大学）はハンガリー前近代環境史の専門家で、彼女と毎日ご飯を食べながら多くを学ぶことができました。さらに、ウプサラの学会で知り合い、現在は近世ヨーロッパにおける捕鯨の研究をしているマリー・ヤロシュ博士（フンボルト大学）のお誘いで、ハレ大学での中世史コロキウムにて報告する機会を得ました。ハレはライプツィヒから近郊列車で30分ほどのところにある都市で、ライプツィヒよりも小規模ながら、当地の先史博物館は現存世界最古の星盤とされる「ネブラ・ディスク（Himmelsscheibe von Nebra）」が展示されていることでもよく知られています。また個人的にはハレ大学は中央アジア史研究の泰斗であるユルゲン・パウル教授がながらく在籍していた場所であり、彼のいた場所で話げできたことに、少なからぬ感慨がありました。内容的にも、現在準備している「14世紀の危機」に関する編著の序文について議論することができ、貴重な機会となりました。

ベルリンやハレ以外にも、ライプツィヒ近郊の諸都市に赴く機会が数度ありました。例えばドレスデンではツヴィンガー宮の内部にある数学・物理学サロン（Mathematisch-Physikalischer Salon）にて、先述のマラーガ天文台にて1288年頃に作成された天球儀を実見することができました。これが現代にまで残されたことがすでに奇跡であるわけですが、その表面には作成者としてムハンマド・ブン・ムアイヤド・アッディーン・ウルディーの名が刻まれています。彼の父ムアイヤド・アッディーン・ウルディーは、マラーガ天文台の創設者であったナ



ムハンマド・ブン・ムアイヤド・アッディーン・ウルディーの天球儀

スィール・アッディーン・トゥースィーやその高弟クトゥブ・アッディーン・シーラーズィーと並んで、プトレマイオスの天動説モデルに極めて重要な改訂を施してコペルニクスの地動説モデルに道を拓いた人物として有名で、彼ら「マラーガ学派」の残照としても、この天球儀には比類のない価値があるのです。またライブツィヒ滞在の最終盤においては、研究所で講演してくれたユダヤ環境史の専門家であるディーン・フィリップ・ベル博士（スパータス・ユダヤ学・指導者養成研究所）を連れて、マルティンさんとアンドレアさんとともに、「中世ユダヤ人関連遺産」で世界遺産に登録されたエアフルトの街を訪れました。1349年、この街はユダヤ人虐殺の舞台となります。

滞在最後のイベントは、ライブツィヒではなくナポリで行われた国際学会“Environmental Anomalies and Political Legitimacy in Global Eurasia (12th–14th Century)”でした。自分の自炊能力の低さゆえ、ドイツの食にやや飽きを見出していた自分としては、食の都ナポリへの遠征は天恵とも言えるもの。マルティンさんが基調講演者の1人として招待されていた関係で、私もペーパーを出し、アクセプトされていました。ヨーロッパ東洋学の中心地の1つであるナポリ東洋大学で行われたこの国際カンファレンスは、題名の通り環境変動と支配の正当性との関わりをユーラシア規模に問うものであり、ナポリ東洋学の伝統を活かして、個々の地域史の専門家たちを幅広く集めるものでありました。今更ながらに書くと、今回の私のライブツィヒ滞在は、マルティンさんがグループリーダーを務めるフォルクスワーゲン財団助成の学術プロジェクト“The Dantean Anomaly (1309–1321): Rapid Climate Change and Late Medieval Europe in a Global Perspective”の資金を基に実現したものでした。「ダンテのアノマリ (The Dantean Anomaly)」とは、かのダンテ・アリギエーリ (1321年没) の没年近くに起こったヨーロッパ規模での気候異常を指すものであり、「14世紀の危機」の先駆けとも見なされるものです。このナポリでの会議で私は、“Irinjin, a Ruler in the Purgatorium: The Hüleğüid Rule in Anatolia during the Period of the Dantean Anomaly (1315–22)”のタイトルで、この「ダンテのアノマリ」が当時のヨーロッパだけでなく西アジアにも見出せることを議論しました。滞在期間中に、招へいプロジェクトに直接関わるテーマで成果を出せたことにつき、安堵しています。

3か月は本当にあつという間でした。研究所や大学図書館はもちろんのこと、ダーフィット通り沿いの自分のアパートや、そこから徒歩5分、ほぼ毎日朝のランニングをしたクララ＝ツェトキン公園、毎週火曜と金曜に市が立つマルクト広場に加えて、金曜日と土曜日にバッハがカントールを務めたライブツィヒ聖トマス教会合唱団 (Thomanerchor Leipzig) が合唱を行う聖トマス教会は思い出深い場所です。特に最後の1週間ほどは、ライブツィヒからエアフルト、そこからハレ、ナポリへと目まぐるしく移動していたのですが、いずれの場所でも素晴らしい史跡や出会い、議論がありました。この滞在中に出会うことのできた方々に、そして何より、この滞在を実現してくれただけでなく、この滞在の全期間において私を厚くサポートしてくださったマルティンさんに心からの感謝を捧げます。



ダーフィット通り沿いのアパート内装

## Оның аты Алматы **その名はアルマトゥ :** **カザフスタン調査滞在記**

松元 晶 (北海道大学大学院文学研究院博士後期課程)

筆者は、松下幸之助記念財団日本人留学生として、カザフスタン・アルマトゥ市に滞在している。ここでは、これまでの滞在を振り返りつつ、現地の生活や研究環境等について紹介したい。なお、現地で受講している授業、アルマトゥから別都市へのアクセスについては、別の機会に譲ることとする。

私は、北海道大学の協定校であるアルファラビ名称カザフ国立大学に所属している。日本の年度に合わせたいという強い希望から、3月末から有効となるビザを発行してもらった。カザフスタンでは通常 11 か月分の学生ビザを発行するらしく、1 年以上滞在する場合には、現地でビザの更新をするか、あるいは一度帰国し、カザフスタン大使館を経由して更新をする必要があるという。

ビザの発行に係る手続きは様々であるが、私の場合、知り合いの知り合いがカザフ国立大学の教員であったため、彼女が実質的な窓口となり、ビザ発給のための招待状を作成してくれた。招待状が完成するまでには、約 1 か月を要した。「金持ちよりもコネ持ちが現地では強い」とカザフ人の知り合いは語っていたが、今回はコネ以上に、北海道大学との関係を強化したいという、相手側の思惑も大きかったように思われる。

### ① 研究活動

私の研究テーマは、1960 年代における中央アジア映画の自己表象である。現地では主にカザフ語やロシア語の資料を読みこみ、研究を進めている。調査対象は『カザフスタン・ブラヴダ Казахстанская правда』や『カザフ文芸新聞 Қазақ әдебиеті』<sup>1</sup>、当時の映画雑誌など多岐にわたるが、これらの資料はすべて国立図書館で閲覧が可能だ。

国立図書館の利用方法は簡単である。初回のみパスポートで登録を行い、2 回目以降は利用者カードを使って入館する。コートや大きな荷物はクロークに預け、閉架にある資料をパソコンで請求する。蔵書検索システムで見当たらない場合は、カタログから探し、紙の伝票で請求をする。資料を受け取るのに 20 ～ 60 分ほどかかる。資料の受け取り場所は、資料のジャンルによって異なる。新聞などの刊行物は 3 階の刊行物ホール、カザフスタン発行の書籍は 2 階、外国書籍は 3 階の世界文学ルーム、そして芸術分野は 1 階の芸術ホールといった具合だ。請求した本を翌日以降も使う場合、受付でその旨を伝えると受付で管理され閉架に返却されない。館内は Wi-Fi が使える。夏は暑く冬は寒い。

国立図書館の面白いところは、カザフスタンで発行された新聞や雑誌はもちろん、ロシアやウズベキスタンで発行された新聞雑誌を数多く取り揃えているところである。モスクワで発行された新聞『ブラヴダПравда』や『イズベスチヤИзвестия』はもちろん、『映画芸術雑誌Искусство кино』、『芸術雑誌Искусство』、更にはウズベキスタンやクルグズタンで発行されていた新聞や書籍を閲覧することができる。このため、ウズベキスタンやクルグズ

1 原題は『カザフ文学』を意味するが、文学に限らず芸術や文化全般を広く取り扱っているため、その実態に即した「文芸新聞」と訳した。

タンでの調査の際には、アルマトウで閲覧できなかった資料を優先的に調べる、といった効率的な進め方が可能だった。

調査を始めたころは、図書館の蔵書検索システムによるキーワード検索に頼ることが多かった。例えば、カザフ映画人のシャケン・アイマノフ氏のインタビューも、当初はその方法で収集を試みていた。『カザフ文芸新聞』に興味を惹かれ、1961年から読み進めていくと、検索では出てこなかった彼の発言が次々と見つかった。パソコンはあくまで補助ツールで、地道に資料を読み進めていくことが一番の近道であることを改めて思った。こうしたカザフ語資料を読み解く中で新たな発見があった。アイマノフは映画だけでなく、劇場にも積極的にコメントや改善案を出していたのだ。映画雑誌でもカザフ映画と他芸術を接続させることを重視する発言が見られた。彼は自身の作品を、映画という枠組みを超えた、より広い文化的文脈に位置付けようとしていたのではないかと感じることもある。そうした姿勢はアイマノフに限らず、『僕の名前はコジャ Менің атым Қожа』を書いたソクパクバエフや、同作を映画化したカルサクバエフのインタビューからも見て取れる。これらカザフ語の資料は、従来の映画研究では光が当たってこなかったものも多く、今後の研究発展に大きく寄与すると考える。ちなみにカザフスタンの資料の探し方はウズベキスタンで応用できたが、クルグズスタンではあまりうまくいかなかった。1960年代、中央アジア各国はそれぞれ違う立場にあったために、新聞や雑誌の位置づけもまた異なるのだ。

図書館以外にも、アーカイブや街の本屋など資料をあたる場所はたくさんある。中でもテレグラムのみで本を販売する個人収集家の販売リストはとても興味深い。彼の販売リストは、自身のその時々に関心による。例えば、カザフ文様に興味があればそのテーマの本が増えるし、ウイグル文化に興味があればまたその本が売りに出される。普通の本屋では見かけることができない貴重な本が多数並ぶ。なお支払いは現金払いのみ対応である。

研究フォーラムやシンポジウムにもたびたび参加し、知見を深める機会としている（写真1）。現地の先生の勧めもあり、これまでにいくつかのシンポジウムを聴講し、時にはロシア語でプレゼンをする機会もあった。扱ったテーマは必ずしも私の研究テーマに直接関わるものではない。AIと人文知、中国映画研究者が語る文革後の潮流、「外国人にカザフ語をいかに教えるのか」など、私の関心に合わせて参加した。こうした場は、現在のカザフスタンの「学術的トレンド」を知る機会となっている。脱植民地化を意識したワークショップも多い。カザフの人々にとって、自国の歴史を再考することは重要な意味を持つ。その熱気はしばしば、研究者の英雄視にも繋がり、新たなナショナリズムの補強材として消費されているとも感じる。歴史の問い直しという営みは、アカデミアを超えて、国や民族の在り方と不可分に結びついていると改めて感じる。

## ② 寮の滞在

寮の生活も紹介したい。ここは小さなカザフ社会である。留学初日、到着が21時を過ぎるためホテルを予約していたが、か



(写真1) 現地映画研究者が集うフォーラムに参加  
(2025年12月筆者撮影)

つて日本に滞在していた現地の院生が気をきかせて段取りをつけてくれたようで、急遽初日から寮に入れることになった。しかし、いざ寮に到着すると私の部屋はなかった。なぜこんな時期に入居者が来るんだと文句を言われたが、挨拶として受け取った。しばらくすると部屋を案内された。警備のアパイ（年長者の女性を指す言葉）によれば、数日はこの部屋で過ごし、後でまた移動することだった。後に知ったことだが、寮内での引越しは珍しいことではない。その言葉の通り、私はその後3回も部屋を移ることになる。今住んでいる部屋は、ドアをこじ開けようとするアパイに鍵をかけて対抗し、これ以上引越しをしたくない！と立てこもって手に入れた大事な部屋だ。

「若手研究者の家 Дом молодых ученых」と呼ばれるこの寮には、正規の外国人留学生、現地の院生、大学教職員とその家族、短期滞在の出張者が暮らす。寮はメインキャンパス内に位置しており、街の中心部へもバスで15分ほどとアクセスが良い。本来、交換留学生は別の寮に割り当てられるらしいが、入居時期が3月と中途半端な時期で、空き部屋の確保が難しいことからこの寮になった。これまで、カザフスタン・アクタウ市、カラカルパクスタン、新疆から来た先生や、クルグズスタンから来た学生がこの寮に短期滞在しているのを見かけた。今は修士課程で学ぶ中国人の女性と一緒に暮らしている。同じ階にはイランから来たカザフ人の学生、寮の管理人、日本人の女子学生、韓国人やイラン人の先生が住んでおり、共同キッチンに行くときそれぞれ異なる雰囲気料理を作っていてとても面白い。

部屋にはシャワーとトイレ、ベッド、机、いす、クローゼットが備え付けてあり、シャワールームを合わせて8畳に満たないほどの大きさである。アルマトウの家賃は年々上がっている。ロシア・ウクライナ戦争によりロシアに行けない学生、ロシアからの疎開者の受け入れ、更にはカザフスタンにおける中国の影響拡大による中国人留学生の増加により、街には外国人が増加している。アクセスが良いところで、かつ、日本と同等の生活水準の家に住むなら、最低でも月600～700米ドル(光熱費は含まれていることもあれば別のこともある)かかる。私の部屋は100米ドルほど(55,000テンゲ)である。ちなみにこの部屋賃は学生の所属(学部生か院生か)や入寮時期によって異なるらしい。

寮の設備の話に戻ると、キッチンは共用で、冷蔵庫やコンロは混むこともある。キッチンには電子レンジはない。調理器具や皿などは自分で用意をする必要がある。私は日本人の学生さんに手伝ってもらい、バザールでキッチン周りのものを仕入れた。洗濯機も共用。しかし、洗濯機は部屋ごとに扱いが違うらしい。私の場合、寮の管理者のアパイに洗濯機を使いたいと話すと、教職員専用と思しき洗濯部屋の鍵を貸してくれる。混む時間を回避できれば、基本待たずに洗濯ができる。私は土日の朝9時(アパイたちの団らんの時間)に鍵を取りに行く。しかし他の学生たちはSNSの「洗濯グループチャット」で、利用順をめぐってもめているらしい。なぜ私がアパイたちの管理する洗濯機を使えるのかはわからないが、詳細を聞くと藪蛇になりかねないので、彼女たちの言うことをきいて洗濯機を使っている。

寮にいるほとんどのアパイたちはカザフ語話者である。彼女たちはロシア語を理解するが、カザフ語で話すといろいろ教えてくれる。カザフスタンにおけるカザフ語とロシア語のバランスは年々複雑かつデリケートな問題になっている。街ではカザフ語を解さない店員への抗議が起こることもあった。ハリウッド映画の字幕や吹き替えにおいても、カザフ語の割合が増え、国立図書館でもカザフ語の更なる普及が目標として掲げられる(写真2)など、カザフ語の運用は社会の大きな潮流になっている。それでも街全体はロシア語の使用場面も非常

に多く、言語をめぐる人々の思いは複雑に絡み合っている。そのため、言語の話になるとヒートアップする人は珍しくない。自分たちの居場所を奪われたと感じるロシア語話者、ロシア語しか使えないカザフ人を否定するカザフ語話者、カザフ語とロシア語が混ざるアルマトゥっ子。私がカザフ語を学んでいるというと、カザフ語話者に褒められることも多い。私の意志とは別に、カザフ語を学んでいるという身体そのものが、「カザフ語の優位性」を補強するナショナルリズムの装置として消費されるケースもまた多い。言語を学ぶということが、いかに政治的・社会的営みであるかを考えさせられる。

アパイたちは基本的に親切だが距離感は難しい。一度、日本からのお土産を渡そうとした際、賄賂に当たると判断されたのか受け取りを拒否された。カザフスタンでは国を挙げて賄賂対策に力を入れているが<sup>2</sup>、何が賄賂に当たるのかという境界線は人々の生活に深く根差している。とある知人は「助産師の機嫌を損ねたら、出産中嫌がらせをされるかもしれない。出産時に助産師に便宜を図ってもらうための金銭は、母子の健康のための投資だ」と割り切っていた。また別の知り合いは、大学入試の替え玉受験は、入学というサービスを買うための手段に過ぎないと語った。もちろん、国も何かしらの対策をとっており、アルマトゥ市は賄賂反対エッセイコンテストを開催したり、街には賄賂反対を掲げる広告が見られるが、それでも「非公式な手段」は、信頼できない社会・医療サービスや先行きの見えない未来から、自らを守るための安心材料、生存戦略として機能している。

寮での生活は、単なる文化の違いでは片付けられない彼らの強さを物語る。年長者を敬い、不便なところは人と人の助け合いによって乗り越え、寮のルールが決まったら理由も説明されずに従うしかない。人々は困難が起きないようにあらかじめ対策をするのではなく、困難が起きたらマンパワーで物事を解決する。滞在中、一度寮で大きな火災が発生したが、寮の管理者は火事になったときを想定しておらず、更には寮生の管理名簿もないので、誰が無事なのかわからず、おそらく全員無事であろうということで話がまとまった（実際負傷者はいなかった）。そんなことがあっても、名簿を作ろうとか避難訓練をしようとかにはならず、また「その時」がきたら人々は力を合わせて乗り越えるのである。

ここまで、ざっくりと振り返った。この街にいと、時間の感覚がいろいろずれて、結果的に日本にいるときより健康的な生活を送れている。いろいろ将来を考えることもあるが、「その時」が来たら考えればよいのかな、とぼんやり思う。エネルギーに満たされた街だから、その激しさにイライラすることもあるし、落ち込んだ気持ちが強引に引き上げられて元気になることもある。いい街だな、と思う。



(写真2) 新聞「Ана тілі 母語」の創刊 35 周年を祝うバナー (2025 年 5 月筆者撮影)

2 カザフスタンの賄賂事情については岡奈津子『「賄賂」のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）に詳しい。

# 学界短信

## 学会カレンダー

2026年	3月21-22日	2025年度日本中央アジア学会年次大会 於筑波大学筑波キャンパス <a href="http://www.jacas.jp">http://www.jacas.jp</a>
	3月25-28日	ABS (Association for Borderlands Studies) 2026 Annual Conference 於アルバカーキ <a href="https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/">https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/</a>
	4月10-12日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Annual Conference 2026 於バーミンガム大学 <a href="https://baseesconference.org">https://baseesconference.org</a>
	5月28-30日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 30th Annual World Convention 於コロンビア大学 <a href="https://www.asnconvention.com">https://www.asnconvention.com</a>
	5月29-31日	The 13th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies 於九州大学・福岡国際会議場 <a href="https://sites.google.com/view/eac2026fukuoka">https://sites.google.com/view/eac2026fukuoka</a>
	6月16-19日	CESS (Central Eurasian Studies Society) Regional Conference 2026 於ナザルバエフ大学 <a href="https://centraleurasia.org/conferences/cess-regional-conference-2026/">https://centraleurasia.org/conferences/cess-regional-conference-2026/</a>
	6月20-21日	日本比較政治学会 2026年度研究大会 於日本大学 <a href="https://www.jacpnet.org/convention/">https://www.jacpnet.org/convention/</a>
	6月27-28日	比較経済体制学会第66回全国大会 於北九州市立大学 <a href="https://www.jacesweb.com">https://www.jacesweb.com</a>
	7月16-17日	スラブ・ユーラシア研究センター 2026年度夏期国際シンポジウム 於SRC
	7月20日	INCSA (国際19世紀研究学会) 日本サテライト会議 於SRC <a href="https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20260220_j.html">https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20260220_j.html</a>
	10月16-17日	2026 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Virtual Convention オンライン <a href="https://aseees.org/convention/2026-annual-convention/">https://aseees.org/convention/2026-annual-convention/</a>
	10月24-25日	ロシア史研究会 2026年度大会 於名古屋外国語大学名駅キャンパス <a href="https://www.roshiashi.com/">https://www.roshiashi.com/</a>
	10月30-11月1日	日本国際政治学会 2026年度研究大会 於幕張メッセ国際会議場 <a href="https://jair.or.jp">https://jair.or.jp</a>
	11月7-8日	日本EU学会 2026年度研究大会 於東京大学駒場キャンパス <a href="https://www.eusa-japan.org/">https://www.eusa-japan.org/</a>
	11月12-15日	2026 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於シカゴ <a href="https://aseees.org/convention/2026-annual-convention/">https://aseees.org/convention/2026-annual-convention/</a>
	11月14-15日	ロシア・東欧学会 2026年度研究大会 於津田塾大学 <a href="https://www.jarees.jp/">https://www.jarees.jp/</a>

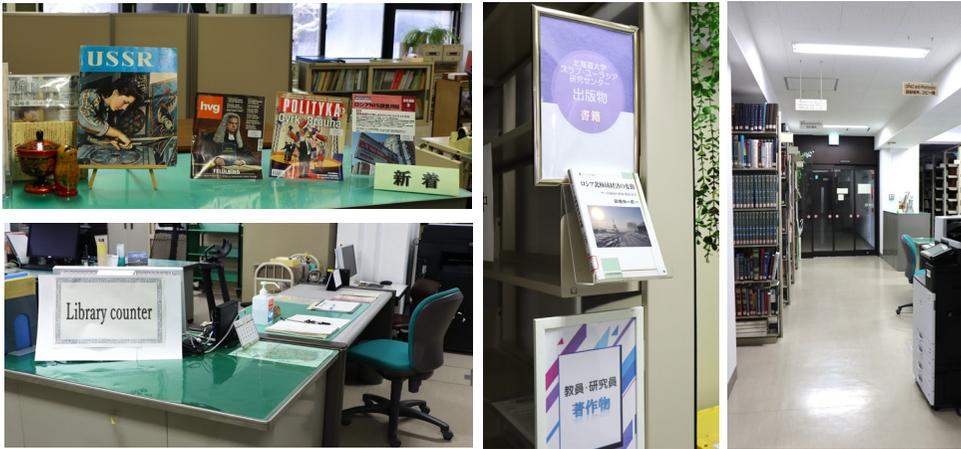
[編集部]

## 図書室だより

### 図書室の一部リニューアル

2025年12月から2026年2月にかけて、図書室のエントランス回りのリニューアルを実施しました。より利用しやすい図書室を目指して、図書室エントランスからの通路を広げ、カウンターを大きくして案内サインを増やしました。

明るく見通しがよくなったスペースに新着資料の展示コーナーを設け、センター関係者著作情報のディスプレイを始めました。今後も魅力ある資料との出会いを提供できる場として改善を進めていきます。[兎内]



左上：新着紹介コーナー、左下：カウンター、中：センター関係者著作コーナー、右：広々とした通路

## 編集室だより

### Acta Slavica Iaponica

*Acta Slavica Iaponica* は現在、46巻につき、特集号となる1号と通常号の2号との編集が大詰めを迎えています。いずれの号も年度末までには刊行できそうです。加えて、46号に関しましても、通常号の1号と特集号の2号とで、現在査読プロセスが進行しているところです。ご寄稿の方々や査読に協力して下さっている方々にあらためて心より御礼申し上げます。良いものを仕上げるべく努力しております。ご期待ください。[諫早]

## 会議

### センター協議員会

2025年度第9回 2025年12月5日-12月10日（メール開催）

1. 名誉研究員の推薦について
2. 部局間交流協定の更新について

2025年度第10回 2025年12月17日（オンライン開催）

1. 次期センター長の選出について
2. 教員の再雇用について
3. 教員人事1について（クロスアポイントメント人事）
4. 教員人事2について（新規クロスアポイントメント人事）

2025年度第11回 2026年1月7日-2026年1月9日（メール会議、電子投票）

1. 次期センター長候補者の選出について
2. 名誉教授の推薦について
3. 客員研究員の採用及び称号付与について
4. 研究生の受入について

2025年度第12回 2026年1月22日-1月26日（メール開催）

1. 教員人事について（新規クロスアポイントメント人事）
2. 部局間交流協定の終結について
3. 教員の兼務について

2025年度第13回 2026年1月27日-1月29日（電子投票）

1. 教員人事について（新規クロスアポイントメント人事）

### センター共同利用・共同研究拠点運営委員会

2025年度第1回 2025年12月10日（オンライン開催）

1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

### センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会

2025年度第1回 2025年11月10日（オンライン開催）

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について

[事務係]

## みせらねあ

### 専任研究員消息

岩下明裕研究員は、10/15–10/22の間、リガ・ストラディンシュ大学での講義、ワークショップ出席、研究打ち合わせのため、リガ（ラトビア）、ヘルシンキ（フィンランド）に出張。また10/22–10/28の間、JIBSN セミナー 2025「境界地域：リスクとまちづくり」出席、現地調査のため、対馬市、釜山・昌原（大韓民国）に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は、11/6–12/3の間、Eurasia from the East 2025 参加、2025 ASEEEES Annual Convention 参加、研究打合せ、資料収集のため、ワシントン、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

宇山智彦研究員は、11/16–11/22の間、「スマートマイニング+」の認証制度の設計や法整備に向けてタスクフォースの立ち上げのため、アスタナ（カザフスタン）に出張。

青島陽子研究員は、11/16–11/25の間、Eurasia from the East 2025 参加、57th Annual ASEEEES Convention 参加のため、ワシントン（アメリカ）に出張。また、12/6–12/13の間、メルボルン大学との合同研究ワークショップ「War, Migration, and Identity: Exploring New Agendas for Ukrainian Studies in the Asia-Pacific Region」参加、現地調査、研究打ち合わせのため、メルボルン（オーストラリア）に出張。

長縄宣博研究員は、11/17–11/25の間、研究報告、57th Annual ASEEEES Convention 出席のため、ワシントン（アメリカ）に出張。

服部倫卓研究員は、11/19–11/25の間、57th Annual ASEEEES Convention 出席、面談のため、ワシントン、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

野町素己研究員は、11/20–12/1の間、「第12回 国際会議：時間と空間における言語と文化」出席、SES36 書評会出席、シンポジウム出席・報告、資料収集のため、ノヴィ・サド、ベオグラード（セルビア）に出張。また、12/6–12/16の間、メルボルン大学との合同研究ワークショップ「War, Migration, and Identity: Exploring New Agendas for Ukrainian Studies in the Asia-Pacific Region」参加、現地調査、研究打ち合わせ、WSでの報告内容に関する共同研究者との論文執筆、言語調査のため、メルボルン、ニューキャッスル（オーストラリア）に出張。この他、12/19–12/22の間、面会のため、ソウル（大韓民国）に出張。

[事務係]

## 目 次

研究の最前線 .....	1
2025年度冬期国際シンポジウム「大国間競争と中小国の生存」開催／北大ーソウル 大ジョイントシンポジウム分科会Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Regionを開催／メルボルン 大学・北海道大学共同開催国際共同ワークショップ報告記／専任・助教・非常 勤研究員セミナー／研究会活動	
第6回 マトリョーシカ・インタビュー .....	17
服部 倫卓 教授	
地域研究を位置づける——サラエヴォからシカゴ、そして札幌へ .....	22
by エディン・ハイダルパシッチ	
SRCでのフェローシップの思い出 .....	24
by オレーナ・パルコ	
ライブニッツ東欧歴史文化研究所滞在記 .....	26
by 諫早 庸一	
Оның аты Алматы その名はアルマトウ：カザフスタン調査滞在記 .....	30
by 松元 晶	
学界短信 .....	34
学会カレンダー	
図書室だより .....	35
図書室の一部リニューアル	
編集室だより .....	35
<i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議 .....	36
センター協議員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共 同利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ .....	37
専任研究員消息	

### 【お知らせ】

本センターニュースは、次号から紙媒体での発行を取りやめ、電子媒体のみで発行することになりました。長い間、紙媒体でご愛読くださった皆様に心よりお礼申し上げます。今後とも本センターのウェブサイトにて電子版をお読みいただければ幸いです。下記リンク先で本センターのメールマガジンにご登録いただければ、各号の発行のご案内をお送りします。

[https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/mail\\_maga/mailmaga12.html](https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/mail_maga/mailmaga12.html)

2026年2月27日発行

編集 田宮彩也香、宇山智彦  
発行者 長縄宣博  
発行所 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター  
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目  
Tel.011-706-2388、706-3156  
Fax.011-706-4952  
インターネットホームページ：  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>